

5. 「広義の中世」の突破期後半(10世紀後半～12世紀後半)

5.1 十字軍都市国家と大セルジューク朝

1097年、第1回十字軍がルーム・セルジューク朝を威圧し、ビザンツ皇帝アレクシオス1世下のビザンツ軍が小アジア西部のニカイア(ニケーア)を奪還する。しかし十字軍の目的はエルサレムの奪取である。奪還したニカイアの守備をビザンツ軍が固め、十字軍はエルサレムを目指す。他方、小アジア東部のアナトリア地方にルーム・セルジューク朝が残る。

約130年前、マケドニア朝ビザンツ皇帝ニケフォロス2世がイスラーム帝国から小アジアを奪還したとき、小アジア南西部のキリキア地方にアルメニア出身の長官を配置した。その後大セルジューク朝の支配から逃れたアルメニア人(アルメニア・キリスト教徒)たちが南コーカサス地方から移住し、キリキア・アルメニア王国を建国する。十字軍はそのキリキア・アルメニア王国に一時滞在した。そしてボードゥアン1世がキリキア東部にエデッサ伯国を建国し、大セルジューク朝ムスリム軍と対峙する。

他方、十字軍本隊は南下してシリア北部の古都アンティオキアを陥落し、アレクシオス1世と和解したロベール・ギスカールの長男ボエモン1世がアンティオキア公国を建国する。

(前章で述べたように、ボエモン1世は父ギスカールからアルバニアやコルフ島を相続したが、ビザンツ帝国とヴェネツィアに奪還され、自身の領地を失っていた。だが、彼はアレクシオス1世と和解し、十字軍遠征に従軍した。アレクシオス1世は、ボエモン1世のアンティオキア公国建国を了承していた)

アンティオキア公国建国後、十字軍本隊はさらに進軍してエルサレムを奪取する。そしてエルサレム王国を建国し、ボードゥアン1世の兄ロレーヌ公ゴッドフロワ・ド・ブイヨンが「エルサレム王」に即位する。

だが1100年、ブイヨンが死去する。急遽、ボードゥアン1世がエデッサ伯国からエルサレムに赴き、エルサレム王に即位する。他方、ファーティマ朝がエルサレム奪還を試みる。ローマ教皇パスカリス2世は、エルサレムへの援軍を呼びかけた。

第1回十字軍は、パレスチナ中部でエルサレム王国を建国し、その後パレスチナ北部のアッコとティルスを取ったが、大きな難題が残り、新たな難題も生じた。大きな難題は、ファーティマ朝がパレスチナ沿岸都市の一部を支配し続け、小アジアのアナトリア地方にルーム・セルジューク朝が残ったことである。新たな難題は、シリア東部とジャズィーラ地方(概ねイラク北部)にムスリム新王朝＝ザンギー朝が誕生したことである。

歴史家たちは、「1101年の十字軍」と呼んでいるが、パスカリス2世の呼びかけに応じて編成された援軍は小アジアの横断過程でルーム・セルジューク朝ムスリム軍に各個撃破され壊滅する。かろうじてトゥールーズ伯レーモンがパレスチナ北部を攻略し、彼の長男ベルトランがトリポリ伯国を建国した。だが1144年、ザンギー朝ムスリム軍がエデッサ伯国を滅ぼす。当時のローマ教皇エウゲニウス3世が新たな十字軍遠征を呼びかける。

第2回十字軍の中心はカペー朝フランス王ルイ7世率いるフランス軍とホーエンシュタウフェン朝ドイツ皇帝コンラート3世率いるドイツ軍である。フランス王とドイツ皇帝が率いる十字軍であったが、シチリア王国と交戦状態に陥っていた当時のビザンツ帝国に彼らを支援する余力がない。ビザンツ軍の支援がないまま小アジア中央を横断した第2回十字軍は、ルーム・セルジューク朝ムスリム軍に各個撃破された。

(当時、ルッジェーロ2世下のシチリア軍がビザンツ版図内に侵入してギリシャのコリントスやテーベを略奪していた。コリントスやテーベでシチリア軍と戦っていたビザンツ軍に、第2回十字軍を支援する余力も引率する余裕もない)

それでもルイ7世とコンラート3世は十字軍を再編し、エルサレム目指して進軍する。途中、ボエモン1世が建国したアンティオキア公国に立ち寄り、その頃のアンティオキア公国は、アキテーヌ公ギョーム9世の次男レーモン・ド・ポワティエが統治していた(ボエモン1世は1111年に死去し、彼の嫡男ボエモン2世も1130年に死去している)。

レーモン・ド・ポワティエは、ルイ7世の妃アリエノールの叔父である。そして、アリエノールもルイ7世に同行していた。レーモン・ド・ポワティエは、ルイ7世とフランス軍がアンティオキア公国に止まり、エデッサ伯国の奪還に協力してほしい、と嘆願する。だが、ルイ7世とフランス軍はアンティオキアを離れ、エルサレムに向かう(その後レーモン・ド・ポワティエはザンギー朝ムスリム軍と戦い戦死する)。

アンティオキア公国を出立した第2回十字軍は、ダマスカスを包囲したが、ダマスカスは陥落しない。そして1152年、ヌールッディーン率いるザンギー朝ムスリム軍に大敗する。ルイ7世とコンラート3世は帰国し、その後コンラート3世が死去する。そして彼の甥フリードリヒがドイツ皇帝フリードリヒ1世に即位した。他方、アリエノールはルイ7世と離婚し、イングランド王ヘンリー2世と再婚する(コラム24)。

(ルイ7世は有能な王であったが、アリエノールは叔父を見殺したルイ7世を許せなかったのかもしれない。作家の佐藤賢一氏は、著書「英仏百年戦争(集英社新書)」で、アリエノールの離婚と再婚を女性にありがちな情緒的出来事であるかのように論じている。しかし、アリエノールは厳格な女性である。筆者は、佐藤氏の認識は間違っていると思う)

ところで、十字軍の戦いを見るだけでは当時の大セルジューク朝を認識できない。第1回十字軍遠征の頃、大セルジューク朝はスルタンの座をめぐる内紛で混乱していた。しかし1118年、アフマド・サンジャールがスルタンに即位して内紛を終結する。その後反旗を翻すガズナ朝とイラク・セルジューク朝を討伐し、さらにサマルカンドに進軍してカラハン朝を討伐する。そして、ホラムズ・シャー朝も支配する。

アフマド・サンジャールの活躍で、大セルジューク朝は一時再興した。だが1141年、耶律大石率いる西遼軍に大敗する。

アフマド・サンジャール率いる大セルジューク朝ムスリム軍が大敗した戦い(カトワーンの戦い)は、「プレスター・ジョン伝説」の起源になったが、河北を奪還して遼=契丹を再興しようとしていた耶律大石には余計な戦いであった(西遼と西遼を支援した天山ウイグル王国=西ウイグル王国の国教は仏教である。国内に景教徒=ネストリウス派キリスト教徒が多数いたとしても、西遼と西ウイグル王国に十字軍を支援する理由はない)。

1143年、耶律大石は東征軍を編成して河北の奪還を目指す。行軍中に死去する。他方、アフマド・サンジャールは大セルジューク朝の再興を目指す。1157年に病死する。

歴史家たちはあまり重視しないが、カトワーンの戦いは10万を越える正規軍同士の戦いであった(中世ヨーロッパ最大の戦いと言われているタンネンベルクの戦いでさえ、兵員の総数はカトワーンの戦いの半数以下である)。双方が正面から激突し、西遼軍が圧勝している。

西遼軍の勝因は武具の差である。だが、騎兵が乗る馬や駱駝の頭数ではない。鉄製武具の質と量の差である。耶律大石は、10万の兵員を集めただけでなく、良質な鉄製武具を各兵に与えていた。

当時のユーラシア大陸東部と西部の決定的なちがいは、鉄の生産量である。北宋期の中国では、庶民も暖房で石炭を消費していた。そして河北の地では、冶金=製鉄で石炭火力が使われていた。他方、ヨーロッパやイスラーム圏の冶金=製鉄で使用する火力は木炭火力である。したがって、当時の鉄の生産量は中国が圧倒していたと考えられ、しかも鋼(スチール)に近い良質な鉄も生産していたように思う。

遼から移住した耶律大石は、河北から多量の鉄と鉄製武具を得ることができた(あるいは、西遼と西ウイグル王国でも多量の鉄と鉄製武具を生産していたかもしれない)。大セルジューク朝ムスリム軍は先端技術で武装した西遼軍に無謀な戦いを仕かけ大敗したわけだが、注視すべきことが他にある。

鉄は農具で使うこともできる。たとえば、南宋で鉄製の農具が普及し、農作物の生産量が著しく増大している。そして、北宋も南宋もヨーロッパやイスラーム世界に多量の鉄や鉄具を輸出できた。にもかかわらず、主要な輸出品は絹織物や陶磁器等であった。商人たちが、重い鉄や鉄具を輸送する手段=大型帆船等を保有していなかったためであると考えられるが、もしも商人たちが鉄を容易に輸送できたとすれば、鉄は当時の世界商品になっていたかもしれない。

歴史家や社会学者たちは、陸路や海路の交易を基準にして近代の起点を考察する場合がある。そして、経済を構成する要素が「富財」から「富財と商品」に移行した場面(商品経済が誕生した場面)を資本主義のはじまりであると論じる場合がある。だが、労働力商品は例外であるが、ほとんどすべての商品が地球規模で流通する社会が資本主義社会である。経済を構成する要素が「富財」から「富財と商品」に移行した場面(12世紀後半~13世紀初頭)を近代の起点にすることができても、資本主義の起点にすることはできない。すなわち、陸路や海路の交易が活発であったとしても、重量物の輸送、とりわけ鉄や鉄具の輸送が困難であった時代を資本主義の時代であったと言うことはできない(コラム25)。

(たとえ重量物の輸送が可能であったとしても、人間労働が商品化=労働力化していない時代を資本主義の時代であったと言うことはできない。それについては後述するが、労働者を奴隷や農奴と区別しない社会学者や経済学者たちが、12世紀~13世紀を資本主義の起点にする場合がある)

アフマド・サンジャールの死後、ホラムズ・シャー朝が再興し、メソポタミア全土とイラン高原、およびホラーサーン地方を支配する。そして1200年、アラーウッディーンがスルタンに即位した。即位後、アラーウッディーンはゴール朝の侵入を阻止してカラハン朝を併合し、首都をサマルカンドに移す。そして1215年、ゴール朝を滅ぼし、アフガニスタン西南部を支配する。

だが1219年、テムジン=チンギス・カン率いるモンゴル軍が侵攻し、ホラムズ・シャー朝は崩壊する。1220年、アラーウッディーンはカスピ海のアバスクン島で死去した。アラーウッディーンの死後、彼の息子ジャラールウッディーンが各地を転戦して「英雄物語」を残し、1231年に死去する。

コラム24: 第2回十字軍の不幸

ビザンツ軍がルーム・セルジューク朝ムスリム軍と対峙すれば、第2回十字軍は無傷のままエルサレムにたどり着けたかもしれない。しかしシチリア軍と戦闘していた当時のビザンツ軍にその余裕はまったくない。他方、ローマ教皇は、シチリア王国とビザンツ帝国の戦争を制止していない。外交上の支援がなかったことが、第2回十字軍の不幸につながる。

ローマ教皇が無能で怠慢であった、とすることもできる。だが、そもそも十字軍遠征が異常である。当時のイスラーム世界の人々には、とりわけエジプトやパレスチナの民衆には、西ヨーロッパ諸国が十字軍を遠征する理由がさっぱりわからなかったと思う。彼らは、現地のキリスト教徒と共存していたのである。また、西ヨーロッパのキリスト教徒のエルサレム巡礼を妨害していたわけでもない。

十字軍とムスリム軍の戦いよりシチリア軍とビザンツ軍の戦いのほうが利害関係があきらかで、戦争の規模も大きい。シチリア王国とビザンツ帝国の戦い、すなわち「中世イタリア」と「中世ギリシャ」の戦いは領土争奪戦であった。

ルッジェーロ2世がシチリア王国を建国してシチリア王に即位したことは前章で述べたが、第2回十字軍遠征と並行してルッジェーロ2世下のシチリア軍がビザンツ版図内に侵入し、コリントスやテーベを略奪した。ビザンツ軍はシチリア軍を撃退したが、その後1154年にルッジェーロ2世が死去し、それを知ったビザンツ皇帝マヌエル1世がイタリア半島南部を征服しようとする。しかしシチリア軍がビザンツ軍を撃退する(ちなみに、マヌエル1世はハンガリーにも侵攻し、ハンガリーを属国化している。マヌエル1世がハンガリーを属国化する経緯は後述する)。

ロベール・ギスカールがアルバニア＝ダルマツィア地方とコルフ島を占領した1081年に、シチリア軍とビザンツ軍の戦いが勃発し、その後戦闘が100年以上続いた。シチリア王国とビザンツ帝国は互いに消耗する。1282年(あるいは1302年)、シチリア王国はナポリ王国とトリナクリア王国に分裂し、ビザンツ帝国は1452年に消滅する。

コラム25: 中国の鉄の生産量

アーノルド・パーシーの「技術の千年史(新評論社)」によれば、998年の中国の鉄の生産量は3万2500トンである。しかし1064年に9万4000トンに増大し、1078年に12万5000トンに増大している。

大セルジューク朝の鉄の生産量は不明であるが、おそらく中国の鉄の生産量よりはるかに少ない。そして、鉄は世界商品化していない。すなわち、多量の鉄や鉄具の輸出入が困難な時代であった。

大セルジューク朝ムスリム軍の大敗は必然であったが、10万以上のムスリム軍が壊滅したというのに、歴史家や社会学者たちはカトワーンの戦いをあまり重視しない。カトワーンの戦いで大敗しなければ、大セルジューク朝は10万以上の兵員を十字軍との戦いに投入し、12世紀中頃に十字軍都市国家が全滅していたかもしれない、というのにである。

他方、歴史家や社会学者たちは、製紙法が伝わったタラス河畔の戦いを重視する。タラス河畔の戦いは中国＝唐とアッバース朝イスラーム帝国の間に生じた戦いであるが、その頃の中国(8世紀の中国)の石炭消費量は微量である。したがって、ユーラシア大陸西部と東部の鉄の生産量に大きな差は生じていない。中国で鉄の生産量が著しく増大したのは、石炭消費量が著しく増大した北宋期である。北宋期の中国では、家庭の暖房でも石炭が使われていた。

5.2 コンスタンティノープルの破壊と復旧

第1回十字軍遠征後、シリアとパレスチナの沿岸都市を失ったファーティマ朝は東地中海の制海権を喪失する。他方、エデッサ伯国を滅ぼしたザンギー朝2代スルターン・ヌールッディーンがダマスカスとシリア北部を支配し、エルサレム王国と対峙する。

1168年、エルサレム王アモーリー率いるエルサレム軍がエジプトに進軍した。ファーティマ朝は急遽ザンギー朝に援軍を要請し、ザンギー朝軍司令シルクーフ率いるムスリム軍がカイロに到着する。ファーティマ朝はシルクーフに宰相の地位を与え、エルサレム軍は撤退した。だが、その後彼が死去したため、彼の甥サラーフッディーンが後を継ぐ。

1169年、エジプトでサラーフッディーンがアイユーブ朝を樹立し、1171年にファーティマ朝が断絶する。ファーティマ朝断絶後、サラーフッディーンはバグダードに赴きカリフからスルターンの座を得る。その後ザンギー朝を併合してエジプトとシリアの大半、およびジャズィーラ地方を支配し、1187年に「ジハード」を宣言する。そして各地のムスリム諸侯を集め、ヒッティーンとの戦いでエルサレム軍を撃破する。ヒッティーンとの戦いで勝利したサラーフッディーン率いるムスリム連合軍は、トルトサとティロス、トリポリ、アンティオキアの四都市を除くシリアとパレスチナの沿岸都市、そしてエルサレムも奪還した。

他方、第1回十字軍の協力を得てニカイアを奪還し、シチリア軍の侵攻も阻止したコムネノス朝ビザンツ帝国はその後キリキア・アルメニア王国とアンティオキア公国を支配する。そして、メンデルス川流域の戦いでルーム・セルジューク朝ムスリム軍を撃破した。

1176年、アナトリア半島の全域奪還を目指すビザンツ皇帝マヌエル1世(在位1143~1180年)が大軍を率いてルーム・セルジューク朝の首都イコニウムに進軍する。だが、ミュリオケファロンの戦いでクルチ・アルスラーン2世率いるルーム・セルジューク朝ムスリム軍に大敗する。

1185年、シチリア軍がビザンツ版図に再度侵入し、コンスタンティノープル近郊のデュッラキウムやテッサロニキを占領した。クーデターが勃発し、イサキオス・アングロスが帝位を篡奪してビザンツ皇帝イサキオス2世に即位する。その後イサキオス2世率いるビザンツ軍がシチリア軍を撃退するが、同年、ペタルとアセンの兄弟が「ブルガリア帝国」の開国を宣言する。イサキオス2世は親征してブルガリアを制圧したが、ペタルとアセンの兄弟はドナウ川以北に逃れ、ビザンツ軍が撤退した後、再度蜂起する。そして1188年、ブルガリアが独立した(他方、1171年にバルカン半島西部でステファン・ネマニャがネマニッチ朝セルビア王国を開国している)。

1195年、イサキオス2世の弟アレクシオス3世が兄を幽閉して皇帝に即位する。このとき、ドイツに亡命したイサキオス2世の長男アレクシオス4世が後に災いの種になるが、ブルガリアとバルカン半島西部＝セルビアを失ったビザンツ帝国は国力が大きく衰退した(コラム26)。

1187年、ヒッティーンとの戦いの敗北を知ったローマ教皇グレゴリウス8世が第3回十字軍遠征を呼びかける。そして1189年、第3回十字軍遠征がはじまる。

第3回十字軍の中心はドイツ皇帝フリードリヒ1世率いるドイツ軍とフランス王フィリップ2世率いるフランス軍、そしてイングランド王リチャード1世率いるイングランド軍である(フィリップ2世がフランス王に即位し、リチャード1世がイングランド王に即位した経緯は後述する)。陸路から進軍したフリードリヒ1世率いるドイツ軍はルーム・セルジューク朝の首都イコニウムを占領する。だが、その後フリードリヒ1世が死去したため、ドイツ軍はフランス軍とイングランド軍に合流する。

(フリードリヒ1世は、ミュリオケファロンの戦いで惨敗したマヌエル1世に使者を派遣して、「ドイツ皇帝こそがローマの正帝であり、ギリシャを支配する存在でもある」と伝えている。ビザンツ帝国から独立したブルガリアがドイツに同盟を申し出ていたこともあり、イコニウムを占領したドイツ軍が反転してコンスタンティノープルに進軍する可能性があった。フリードリヒ1世は、サレフ河で沐浴中に溺死したと伝えられているが、ビザンツ帝国が暗殺した可能性を否定できない)

他方、海路から進軍したフィリップ2世率いるフランス軍とリチャード1世率いるイングランド軍は1191年にパレスチナの沿岸都市アッコ(アッコ)を陥落する。アッコ陥落後、フィリップ2世とフランス軍は帰国した。残ったリチャード1世下のイングランド軍、イングランド軍に合流したドイツ軍がヤッファやアルスーフ等パレスチナ沿岸都市を陥落したが、エルサレムを奪還できなかった。

1192年、リチャード1世はサラーフッディーンと休戦協定を結び帰国する。イングランド軍とドイツ軍も帰国した。そして1193年、英雄サラーフッディーンがダマスカスで死去する。

サラーフッディーンの後、ローマ教皇インノケンティウス3世が第4回十字軍遠征を呼びかける。そして1202年、第4回十字軍遠征がはじまる。

第4回十字軍に国王は参加していない。中心は若い貴族たちであったが、呼びかけ人のインノケンティウス3世には好ましいことであるように思えたい。だが、彼らがシリアやパレスチナ、エジプトに進軍してアイユーブ朝ムスリム軍と戦う場面はなかった。小アジアでルーム・セルジューク朝ムスリム軍と戦う場面もなかった。彼らは、コンスタンティノープルに進軍する。進軍の口実は、「帝位を篡奪したアレクシオス3世を廃位し、正統な帝位継承者であるアレクシオス4世を即位させる」というものである。とはいえ、目的はアレクシオス4世が約束した多額の報酬である。

(ハンガリーやヴェネツィアも金貨を鑄造して発行していたが、当時のヨーロッパでは、ローマ教皇およびビザンツ皇帝が発行する金貨が「正貨」である。そして、第4回十字軍に参加した若い貴族たちは、多額の借金を抱えていた。貸し手はヴェネツィア商人である)

1203年、十字軍の支援を得たアレクシオス4世がビザンツ皇帝に即位する。しかし、アレクシオス4世は約束した報酬を支払わない。翌1204年、ドゥーカス・ムルツフロスがアレクシオス4世を殺害し、ビザンツ皇帝に即位する。そしてアレクシオス4世が約束した報酬を破棄する。

激昂した十字軍がコンスタンティノープルを占領し、富財を略奪した。荒廃したコンスタンティノープルで、フランドル伯ボードゥアン9世が「ラテン帝国」の開国を宣言し、モンフェラート侯ボニファチオが「テッサロニキ王国」の開国を宣言する。

しかし1205年、二人の兄(ペタルとアセン)の後を継ぎ「ブルガリア皇帝」に即位したカロヤンがアドリアノープル近郊でラテン帝国軍を撃破し、ボードゥアン9世を捕縛して処刑する。そして1207年、テッサロニキ王国に侵攻する。モンフェラート侯ボニファチオは戦死したが、カロヤンもテッサロニキ包囲中に部下のマスタルに殺害された(カロヤンは熱心なギリシャ正教徒であった。カロヤンは、ビザンツ皇帝即位を目指していたかもしれない)。

コンスタンティノープルを失ったビザンツ帝国の皇族や貴族たちは、小アジアのビザンツ領でニカイア帝国とトレビゾンド帝国を建国し、バルカン半島のビザンツ領でエピロス専制侯国を建国する。そして1261年、偶然であったが、ニカイア帝国の兵士がコンスタンティノープルを奪還する。その後ニカイア帝国の共同皇帝ミカエル・パレオロゴス＝ミカエル8世がコンスタンティノープルに移り、パレオロゴス朝ビザンツ帝国を開国する(コラム27)。

ところで、一部の歴史家が、ヴェネツィアを「悪人」にして第4回十字軍のコンスタンティノープル破壊を論じている。だが、ミュリオケファロンの戦いで惨敗したビザンツ帝国はいつ征服されてもおかしくない状況に陥っていた。

1185年にシチリア軍がビザンツ版図内に侵入したが、シチリア王グリエルモ2世はコンスタンティノープルの占領も目指していた。1188年のブルガリア独立は「可能な革命」であったし、第3回十字軍遠征に参加したドイツ皇帝フリードリヒ1世もコンスタンティノープル占領を目指していたかもしれない。

当時のビザンツ帝国は、中世帝国のスキーム、すなわち皇帝が財貨を発行して最初に使用する体制を維持できなくなっていた。ビザンツ皇帝が発行する金貨は質も量も低下し、版図内では秤量貨幣化した銀貨が流通していた。劣化した金貨と銀貨の交換は容易でないが、それでもビザンツ帝国が命脈を保つことができたのは、絹織物を生産していたからである。また、プロノイア制＝封建制下で自由農民が家畜を養い、多種多様な農作物を生産していたからである(荘園制の下では、農民は自身の意志で家畜を養うことができないし、商品性の高い農作物を選択して栽培することもできない)。

おそらく、アモリア朝期のビザンツ帝国で物品貨幣が消滅した。マケドニア朝期のビザンツ帝国は、コンスタンティノープルだけでなく、テーベやテッサロニキ等ギリシャ都市でも絹織物の生産をはじめた。そして、コムネノス朝期に、十字軍都市国家の戦争需要と食料需要を満たすため、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人がビザンツ産の馬や穀物を扱うようになる。

(12世紀に、ヴェネツィア商人が馬を輸送するガレー船を発明した。この「発明」の意義は大きい。ビザンツ帝国の自由農民が馬を飼育し、馬の飼料＝ライ麦等も栽培するようになる。筆者の認識では、穀物がゼロ次商品になり、家畜が一次商品になる。そして経済空間に位相構造＝商品経済が生じる。ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人がビザンツ産の馬や穀物を輸送したおかげで、13世紀末まで、シリアやパレスチナの十字軍都市国家が存続した。余談であるが、江上波夫氏が提唱した「騎馬民族征服王朝説」は滑稽と言うしかない。馬を運ぶ船は大きいし、仕組みが複雑である。丸木舟程度の船舶で馬の輸送はできない。人類は、ヴェネツィアが専用船舶を発明した12世紀にようやく海路で馬を輸送した。したがって、たとえ外来王朝であったとしても、大和朝廷は征服王朝ではない。外来王朝が平和裏に土着して支配者層を形成した歴史上の事例はたくさんある。筆者は、滅亡した加羅＝任那の王族が日本に亡命し、大和地方の豪族と婚姻関係を結び、大和朝廷の基礎をつくったと考える。そして、日本書紀から察するに、その後二度目の亡命があった)

コムネノス朝期(1081～1185年)のビザンツ帝国で、経済空間に位相構造＝商品経済が生じた。同時代のユーラシア大陸東部＝南宋も同様である。すなわち、12世紀から「広義の近代」がはじまった。だが、すでに述べたように、資本主義経済がはじまったと言うことはできない。はじまったのは商品経済であり、市場経済でさえまだはじまっていない。

物品貨幣(家畜や穀物)が併存する時代の財貨は「制度」である。物品貨幣に利息が生じて、財貨に利息は生じない。近代の起点と資本主義経済の起点を同一視する社会学者や経済学者たちは、財貨と物品貨幣が併存する時代が長く続いたとの認識、そして物品貨幣が消滅した場面で財貨に金利が生じたとの認識を持っていないように思う。たとえば、経済学者の水野和夫氏は、ローマ教皇庁が金利を容認した13世紀初頭から資本主義経済がはじまったと論じている。だが、それ以前に物品貨幣が消滅したビザンツ帝国で金利が合法化している。

11世紀のコンスタンティノープルの金利は6～8%前後であった。6世紀に制定したユスティニアヌス法も金利を容認していたが、ビザンツ帝国は国法＝バシリカ法の下で金利を合法化する(すなわち、返済や金利の不払いに対する罰則等を制定する)。

ビザンツ帝国の経済規模が、金利の合法化を可能にした、とも言える。11世紀のビザンツ帝国の人口は約2000万で、ドイツとイタリア、フランスを合わせた人口より大きい。物品貨幣が消滅して家畜や穀物が商品化し、人口増を促進したように思う。

(筆者は、9～10世紀のビザンツ帝国で物品貨幣が消滅したと考えるが、西ヨーロッパで物品貨幣が消滅するのは11～12世紀である。西ヨーロッパで財貨に金利が生じるのはそれ以後で、ローマ教皇庁の金利容認は現状を追認したにすぎない。金利のはじまりは物品貨幣の消滅を意味するが、資本主義経済のはじまりではない。マルクスは、「資本論」第3巻で、金利をテコにして貨幣の道具的側面＝資本的使用価値を論じているが、ビザンツ帝国の金利合法化は財貨の制度的側面を補正する措置であった。すなわち、劣化が続く金貨と銀貨を交換する上で必要な措置であり、金融資本等の力関係の下で変動する現代の金利ではない。筆者の認識では、西ヨーロッパ諸国はビザンツ帝国の「制度」を模倣した。他方、金利を容認したローマ教皇庁は新金貨＝フローリン金貨を鑄造して発行する。余談であるが、前述した水野氏は、同時代のイタリアで葡萄畑が拡大したことも資本主義経済誕生の根拠にしているが、小氷河期の影響を見落としている。12世紀中頃から小氷河期がはじまり、パリ盆地とイングランドの葡萄畑が消滅した。イタリアの葡萄畑の拡大は葡萄の供給不足に応じたもので、資本主義経済誕生の根拠にするような「事件」ではない。筆者の認識では、復旧したビザンツ帝国＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国で工業が進展する。とはいえ、資本主義経済のはじまりではない。人間労働の商品化がはじまるのは18世紀後半で、商品化した人間労働の分業と協業がはじまるのは19世紀後半である。マルクスの考えに従えば、商品化した人間労働＝労働力の分業が絶対的剰余価値を産出し、協業が相対的剰余価値を産出する)

また歴史家たちは、コンスタンティノープル陥落後にヴェネツィアが得た「利(エーゲ海諸島の獲得や東地中海の制海権等)」を重視する。だが、ヴェネツィア以上に「利」を得た国家がひとつある。ルーム・セルジューク朝である。

ミュリオケファロンの戦い後、ルーム・セルジューク朝は隣接するダニシュメンド朝を滅ぼし、アナトリアの支配地域を拡大した。しかしフリードリヒ1世下のドイツ軍に首都イコニウムを一時占領され、その後内乱が勃発する。だが1207年、スルターンに復位したカイホスロー1世(ミュリオケファロンの戦いで勝利したクルチ・アルスラーン2世の末子)がエーゲ海沿岸の都市アンタルヤを占領してヴェネツィアとの交易をはじめめる。

1210年、カイホスロー1世が死去し、彼の長男カイカーウス1世が弟のカイクバード1世を幽閉してスルターンに即位する。即位後、カイカーウス1世はトレビゾンド帝国を攻撃して黒海沿岸の都市シノブを獲得する。ルーム・セルジューク朝は、エーゲ海沿岸と黒海沿岸の両面を得た。その後カイカーウス1世は、シリアに進軍して病死する。

(シチリア王国とビザンツ帝国の戦闘が続いたように、旧イスラーム帝国内でもムスリム王朝間の戦闘が続いていた。十字軍とムスリム軍の戦闘よりそちらのほうが戦闘の規模が大きい。ルーム・セルジューク朝にとって、周囲のムスリム王朝は敵国である。国力が増大したルーム・セルジューク朝がイスラーム帝国の再興を目指すのは、当然のことであった)

カイカーウス1世の死後、幽閉されていたカイクバード1世がスルターンに即位する。カイクバード1世はカロノロスを占領してエーゲ海沿岸の拠点を強化し、他方、黒海を横断してクリミア半島湾岸を征服する。ルーム・セルジューク朝は黒海の海上を支配した。そしてエーゲ海沿岸と黒海沿岸の陸上中継交易で多大な「利」を得る。だが、繁栄は長く続かなかった。

1243年、カイホスロー2世下のルーム・セルジューク朝ムスリム軍がモンゴル軍＝探馬(タマ)軍に惨敗する。その後ルーム・セルジューク朝はモンゴル帝国に服属した。

(モンゴル軍＝探馬軍とルーム・セルジューク朝ムスリム軍の戦い＝キョセ・ダグの戦いは、兵員数の差が勝敗を決めたと伝えられている。だが、探馬軍は遠征軍である。しかもモンゴル軍の主力部隊ではない。ふつう、兵員数で遠征軍が現地軍を圧倒する場面はない。まして主力部隊でない遠征軍が圧倒する場面はない。にもかかわらず、探馬軍の兵員数が圧倒していたとすれば、ルーム・セルジューク朝ムスリム軍の武具数が少なかったのかもしれない。すでに述べたが、当時のユーラシア大陸東部と西部の決定的なちがい(圧倒的な非対称性)は鉄の生産量である。ヴェネツィア商人もジェノヴァ商人も多量の鉄や鉄具を扱うことができなかった)

コラム26: モラヴィア王国とセルビア王国

前章で述べたように、9世紀初頭、スラヴ人がボヘミア（現在のチェコ）でモラヴィア王国を建国している。当初、モラヴィア王国の国教会はカトリック教会であった。だが846年に即位したラスチスラフが東フランク王国の支配を嫌い、ビザンツ帝国に宣教師の派遣を依頼する。このとき、ビザンツ帝国が派遣した宣教師がコラム17で述べたキュリロスとメトディオスの兄弟である。

ギリシャ正教会がモラヴィア王国の国教会になったが、東フランク王国＝ドイツの支援を得たラスチスラフの弟スヴァトプルクが870年に王位を篡奪する。そしてメトディオスが死去し、キュリロスや彼の弟子たちが追放された。しかし彼らはブルガリアに移動してキリル文字を考案し、聖書をスラヴ語に翻訳する。

スヴァトプルクは、モラヴィア王国の版図を現在のハンガリーとポーランド、バルカン半島西部に広げた。しかしスヴァトプルクの死後、東方のマジャール人がパンノニア地方に侵入し、モラヴィア王国を滅ぼす。ドイツ皇帝オットー1世がマジャール人のドイツ侵入を阻止し、マジャール人はパンノニア地方に定住する。以後、ハンガリーを挟んで東ヨーロッパのスラヴ人がチェコやポーランドの西スラヴ人とセルビアやクロアチア、スロベニア、ボスニアの南スラヴ人に分離する（ただし、このような西スラヴと南スラヴの分け方には異論もある。ちなみに、ロシア人やウクライナ人は東スラヴ人である）。

ステファン・ネマニャが建国したセルビア王国は南スラヴ（ユーゴスラヴ）人が建国した最初の王国である。セルビア王国はステファン・ウロシュ4世ドゥシャン（在位1331～1355年）の代に版図を広げ「帝国」化するが、ドゥシャンの死後、分裂する。そして1371年のマリツァの戦いと1389年のコソボの戦いでオスマン帝国に敗北し、滅亡する。

コラム27: 東西キリスト教会の分裂

1453年にメフメト2世率いるオスマン軍がコンスタンティノープルを陥落し、ビザンツ帝国が滅亡する。だが、「帝国」の体制は第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した場面で崩壊している。そしてキリスト教会の東西分裂（ギリシャ正教会とカトリック教会の分裂）を決定づけた。

カトリック教会の信徒たち（すなわち第4回十字軍）がコンスタンティノープルで略奪を行い、しかもローマ教皇がそれを事後承諾したため（すなわちラテン帝国の開国を認めたため）、ギリシャ正教会の司祭や司教、信徒たちは「反カトリック」になる。他方、ローマ教皇庁はカトリック教会以外のキリスト教会をすべて異端視するようになる。

とはいえ、ギリシャ正教会とカトリック教会の教義上のちがいはわずかである。したがって統合の試みは続いたが、国教の統合は新たな最高法規の制定である（平たく言えば「改憲」である）。ギリシャ正教会が「教皇権」を認める場面はなかった。すなわち、ローマ教皇が統治権者として金貨を発行することを容認しなかった。

むろん金貨発行の他にも問題があった。コラム18で述べたように、ビザンツ帝国はマケドニア朝期にバシリカ法典を編纂し、皇帝が「国法」を制定して執行する初期法治国家に変貌している。しかしギリシャ正教会が教皇権を承認すれば、ローマ教皇がバルカン半島や小アジア、エーゲ海沿岸や黒海沿岸等で君臨する。それは中世的政体＝司法府中心型政治体制への回帰でもある。近代の最高法規＝憲法に相当するものはなかったが、国法の下で裁判等を担っていたギリシャ正教会の司教や司祭たちは、立法主義と無縁な「野蛮」を承認できない。

5.3 ドイツとイタリアの動向

10世紀後半から、ヨーロッパ諸国の国王がビザンツ帝国のプロノイア制＝封建制を模倣して森林を恩貸地化し、諸侯に下賜しはじめる。そしてビザンツ帝国同様、世襲を認める。歴史家たちは、森林の恩貸地化と開墾、世襲化を「大開墾」と呼んでいる。「大開墾」が本格化したのは11世紀中頃である。多くの農民が恩貸地に移住し、森林の開墾が進展する。他方、古代ローマ期から続いていた荘園が労働力を失い衰退する。

(過去に、フランク王カール1世が諸侯に「恩貸地」を下賜した。しかし、彼は土地の世襲を認めていない。したがって、諸侯が土地を開墾する場面もない。ヨーロッパで土地の開墾が進展したのは10世紀後半以降である。尚、本書では、ヨーロッパの中世農村社会を語る場面で「バン領主」や「農奴」、「タイユ税」等の用語を使わない。それら用語はあまりに多義的で地域差も大きい。また本書では、歴史家が「古典荘園」と呼ぶ荘園だけを「荘園」と呼ぶ)

鉄製の斧やノコギリが樹木の伐採を容易にした。開墾した農地の耕作で家畜と鉄製農具が使われ、脱穀で水車が使われるようになる。そして、農作業の協働化が進展する。開墾地＝農地の多くが共有地になり、三圃式農業もはじまる。その後点在していた農家が利便性の高い場所に集まり、ヨーロッパ各地で村落共同体＝農村が誕生した。

歴史家たちは、開墾から村落共同体＝農村が誕生するまでの過程を「中世農業革命」と呼んでいるが、宗教改革運動とドイツ農民戦争が勃発した16世紀のヨーロッパでは、農民たちは「古きよき法の時代」と呼んだ。ヨーロッパの中世農業革命＝大開墾時代は13世紀初頭まで続き、数千万ヘクタールの森林＝原生林が農地になる。

農地の拡大により、家畜の頭数と穀物生産量が増大する。またヴェネツィア商人やジェノヴァ商人がビザンツ産の家畜や穀物を「商品」として扱ったように、ドイツやフランスの商人たちも家畜や穀物を「商品」として扱うようになる。ヨーロッパ各地に商工都市が誕生し、パリやケルン、ボンのような古都も商工都市化した。すなわち、ヨーロッパで都市が商工業を担うようになる。ハンザ同盟については後述するが、村落共同体＝農村の誕生と商工都市＝中世都市の誕生に同時代性がある。

(しかし14世紀中頃に黒死病が蔓延したため、農村も都市も一時疲弊する。ちなみに、ヨーロッパでは、古代ローマ期に建設された都市だけが「古都」である。すなわち、「広義の中世」がはじまる前、あるいはコンスタンティヌス1世がコンスタンティノブルを建設する前に建設された都市だけが「古都」である。大開墾時代にそれら「古都」も商工都市化した)

だが、封建制は新たな問題を引き起こした。ビザンツ帝国では、国法の下で皇帝が諸侯を支配し、版図内を統治する。したがって皇帝と諸侯の関係は主従関係である。しかもギリシャ正教会の総司教(カトリック教会の教皇に相当する)も皇帝の家臣である。皇帝は国法を制定して諸侯間の争いを未然に防ぐことができるし、裁くこともできる(同じことが、同時代の中国(北宋と南宋)についても言える)。

しかしヨーロッパ諸国は、ビザンツ帝国の影響下にあったハンガリー王国やキエフ大公国、そしてドイツ帝国は例外であるが、「国法」を保有していない。したがって国王と諸侯の関係は契約関係になる。諸侯は複数の国王と契約できるし、条件のよいほうを選ぶこともできる。国王とドイツ皇帝やローマ教皇の関係も同様である。西ヨーロッパで、より多くの国王や諸侯を従えようとするドイツ皇帝とローマ教皇の間に宗主権争いが生じた(コラム28)。

10世紀にオットー1世(正確にはオットー1世の嫡子リウドルフ)が中世イタリア王国を征服し、その後イタリア北部がドイツ帝国の版図になる。とはいえ、イタリア北部の諸侯や民衆はドイツ帝国の「法」に従わない。ドイツ皇帝フリードリヒ1世はイタリア遠征を繰り返した。1158年の遠征で、イタリア北部の14都市を支配する場面があったが、多大な税＝上納金を要求したため、14都市が離反する。激怒したフリードリヒ1世はミラノを破壊したが、反乱は止まない。

1165年、ローマ教皇アレクサンデル3世がフリードリヒ1世を破門する。その後14都市がロンバルディア同盟を結成し、ローマ教皇の宗主権を認める。フリードリヒ1世は再度イタリア遠征を計画するが、盟友ザクセン公ハインリヒが同行を拒否し、他の諸侯たちも拒否する。それでもフリードリヒ1世は傭兵を雇って軍を編成し、イタリア北部に進軍する。だが1176年のレニャーノの戦いでロンバルディア同盟軍に敗北する。その後フリードリヒ1世はローマ教皇アレクサンデル3世と和解し、イタリア支配を断念する(ちなみに、「ロンバルディア」の名称は「ランゴバルド」に由来する)。

ドイツに帰国したフリードリヒ1世はザクセン公ハインリヒを弾劾した。そして1181年、ザクセン地方に進軍する。ハインリヒはすべての領地を失い、イングランド王ヘンリー2世の元に身を寄せる(ハインリヒの妻はヘンリー2世の長女マチルダである)。

ザクセン公ハインリヒを追放した後、フリードリヒ1世はボヘミア王国(現在のチェコ共和国)やハンガリー王国、ポーランド王国を支配下に置き(ただしポーランド支配は失敗する)、さらにシチリア王国と婚姻関係を結び勢力を拡大する。その後第3回十字軍遠征に参戦して死去したことはすでに述べたが、それを知ったザクセン公ハインリヒがドイツに帰国する。そしてフリードリヒ1世の後を継いだハインリヒ6世を破り、領地を取り戻す。しかしザクセン公ハインリヒは自身の死期を悟っていた。彼はハインリヒ6世と和解し、1195年に死去する。

1189年、シチリア王グリエルモ2世が死去し、彼の従兄弟タンクレーディがシチリア王に即位する。ローマ教皇ケレスティヌス3世は、タンクレーディのシチリア王位を承認した。しかし正統な王位継承者はドイツ皇帝ハインリヒ6世の妃コンスタンツァ(シチリア王ルッジェーロ2世の末娘)である。ハインリヒ6世はシチリア王即位を目指す。彼はナポリ遠征を繰り返し、1192年にイングランド王リチャード1世を捕縛した(ハインリヒ6世がリチャード1世を捕縛した事件の背景は後述する)。

リチャード1世の捕縛に激怒したローマ教皇ケレスティヌス3世がハインリヒ6世を破門する。しかし1194年にシチリア王タンクレーディが死去する。ケレスティヌス3世はタンクレーディの次男グリエルモ3世のシチリア王位を承認するが、ハインリヒ6世がドイツ軍を率いてナポリに進軍し、シチリア王位を篡奪する。だが1197年、ハインリヒ6世はメッシーナで死去する。

ハインリヒ6世が死去したとき、彼の長男フリードリヒは3歳であった。約140年前にハインリヒ3世が死去した場面、あるいは約210年前にオットー2世が死去した場面と同様な場面がドイツとイタリアで生じた。コンスタンツァは、ハインリヒ6世の弟フィリップのドイツ皇帝即位を承認する。他方、シチリア王国におけるローマ教皇の宗主権を認め、ローマ教皇インノケンティウス3世を後見人にしてフリードリヒをシチリア王に即位させる。そして1198年に死去する。

コンスタンツァは、成人した息子が穏やかに暮らすことを願っていたかもしれない。だが、後見人の質が悪すぎた。インノケンティウス3世は、コンスタンティノープルを破壊した第4回十字軍遠征の呼びかけ人で、野心の塊のような人物である。しかも無能である。フリードリヒが成人するまでの間、シチリア王国で内乱が続く。だが、インノケンティウス3世は自身の無能を省みない。それどころか、イタリア全土の執行権＝行政権を得ようとする(余談であるが、無能な者ほど権力に固執する。しかも厄介なことに、無能な者ほど自身の無能さに気づかない)。

1208年、ドイツ皇帝フィリップが死去する。娘の結婚問題が原因で殺害されたとされているが、主犯はインノケンティウス3世である。フィリップの死後、インノケンティウス3世はザクセン公ハインリヒの次男オットーをドイツ皇帝オットー4世に推挙する。正統な帝位継承者はフリードリヒであるが、インノケンティウス3世は慣例を無視した。そして、見返りに六つの特許状を得る。それら特許状は、ローマ教皇がイタリア全土の支配者になることを意味していた。

だが即位後、オットー4世はインノケンティウス3世との誓約を破棄する。そしてローマに進軍し、1122年にハイリヒ5世が結んだヴォルムス協約を取り消す。さらにドイツ皇帝に聖職者叙任権を付与することを迫る(ヴォルムス協約を取り消せば、六つの特許状は自動消滅する。また、ドイツ皇帝が聖職者叙任権を得れば、ドイツ皇帝がローマ教皇を指名し、ローマ教皇がドイツ皇帝を推挙する場面がなくなる)。他方、シチリア王フリードリヒに臣従を求め、シチリア王国に進軍した。

インノケンティウス3世はオットー4世を破門し、新ドイツ皇帝選出を呼びかける。1212年、シチリア王フリードリヒがドイツに赴きニュルンベルクで新ドイツ皇帝フリードリヒ2世に即位する。彼を推挙したのはフランス王フィリップ2世である。オットー4世は急遽ドイツに引き返した。

経緯は後述するが、当時、フランス王フィリップ2世はイングランド王ジョンと支配地争いを繰り返し広げていた。そしてジョンは、オットー4世と同盟し、フィリップ2世下のフランス軍を挟撃する戦略を描いていた。しかも愚かなことに、インノケンティウス3世は1213年にジョンの破門を解いている(インノケンティウス3世は1209年にジョンを破門した。破門を解く見返りはイングランド全土の寄進である)。

だが1214年、ブーヴィーヌの戦いでイングランド・ドイツ連合軍がフィリップ2世下のフランス軍に大敗する。その後オットー4世はブラウンシュヴァイクに蟄居し、名実ともにフリードリヒ2世がドイツ皇帝になる。そして1216年、ローマ教皇インノケンティウス3世が死去する。

フリードリヒ2世が即位し、インノケンティウス3世が死去した後、ドイツ皇帝とローマ教皇の宗主権争い(あるいは「立法者」の地位をめぐる争い)が激化する。他方、フランス王とイングランド王の支配地争いも続く。それらについては後述するが、商品経済の進展が争いを大きくした。すでに述べたが、ヨーロッパ各地で家畜や穀物が物品貨幣から「商品」に変貌したのは12世紀後半である。ヨーロッパ各地で領地や領土の争奪が激化するのもその頃からである。

コラム28: レーエン制

封建制は身分制と恩貸地制が複合した統治制度である。官僚制度と統治制度を厳密に区別しない歴史家や社会学者が、封建制下の身分を官位と考え、恩貸地を荘園と同等に論じる場合がある。しかし身分は官位ではないし、恩貸地は荘園＝古典荘園ではない。筆者の認識では、西ヨーロッパで最初に誕生した封建国家はホーエンシュタウフェン朝ドイツ帝国で、その後カペー朝フランス王国がドイツ帝国から封建制を「輸入」した(本文で述べたように、カロリング朝フランク王カール1世は恩貸地の世襲を認めていない)。

ドイツの封建制は「レーエン制」と呼ばれている。歴史家や社会学者の多くが、レーエン制をゲルマン人の伝統的な従土制が発展したものである、と論じている。だが、伝統的従土制は土地の世襲を認めていない。ドイツは、ビザンツ帝国のプロノイア制を模倣した。プロノイア制を模倣した封建制＝レーエン制下で恩貸地の世襲が可能になり、恩貸地内での徴税も可能になる。

当初、恩貸地内での徴税は物納であった。それについて、政治学者の大竹弘二氏が、國分功一郎氏との対談本「統治新論(太田出版)」で以下のように論じている。

「たしかに、近代主権国家自体が、歴史的に見れば過渡的な制度なのかもしれませんが。そもそも近代国家は、貨幣経済の発達と連動するかたちで成立しました。貨幣経済が未発達だった中世の封建社会は労働地代(賦役)や現物地代(物納)が主でしたが、これでは遠隔地から多額の税を集めることはできない。しかし貨幣経済がすすんで、納税が貨幣でおこなわれるようになると、より広い地域から徴税できるようになり、中央集権的な国家を形成することが可能になった。けれども、その貨幣経済が国家を越えつつあるのが現代です。貨幣経済を「租税国家」というかたちで飼いつづけていたのが近代国家だったわけですが、タックス・ヘイブンなどの問題に見られるように、それができなくなりつつある」

貨幣経済が進展したのは「近代」ではない。「中世」である。大竹氏はビザンツ帝国を見ていないし、北宋期や南宋期の中国も見えていない。

おそらく、アモリア朝期から、ビザンツ帝国の徴税は金納であった。当時、西ヨーロッパ諸国の徴税が賦役や物納であったのは、諸侯の所領がほとんど恩貸地で、ドイツ皇帝やフランス王が恩貸地内での徴税を認めたためである。商品経済の下で、諸侯たちは物品貨幣(家畜や穀物)を財貨に換えた。

大竹氏にとって、貨幣経済と商品経済は同じで、資本主義経済もおそらく同じである。そのような認識は間違いであると言うしかないが、筆者が注視する部分は他にある。大竹氏は、国家を制度として論じ、他方、貨幣を制度として論じない。しかし国家が制度であるとすれば、貨幣も制度である。

貨幣は道具的側面と商品的側面を有するが、制度的側面も有する。しかも西ヨーロッパ諸国の納税が物納から金納に移行するのは近代主権国家が誕生するかなり前で、12～13世紀である。

徴税請負人が、物納＝物品貨幣を換金＝財貨化して納税していた。すなわち、徴税請負人は家畜や穀物を販売する商人であった。彼らは家畜や穀物の販売で得た利益で自身の税と農民の税を納税していた(おそらく、家畜や穀物の販売は「許認可事業」であった。ちなみに、同時代＝鎌倉時代の日本の知行制はレーエン制に近いが、日本は中国＝南宋から封建制を「輸入」した)。

日本も同様であるが、開墾が西ヨーロッパの封建制を可能にする。西ヨーロッパの場合、開墾した広大な農地が三圃式農業も可能にした。それにより西ヨーロッパの穀物生産量が急増する。1粒の麦から3粒程度の麦しか生産できなかった西ヨーロッパの農民が、1粒の麦から10粒以上の麦を生産するようになり、西ヨーロッパの人口が約三倍に増加した(ちなみに、日本の水田には1粒の米から100粒以上の米を生産する力がある)。

穀物生産量の増大が人口増につながり、他の様々な農作物の生産も可能にする。とりわけ家畜の飼料(ライ麦や大麦)を栽培できるようになったことが大きい。だが、開墾による森林喪失の代償も大きかったように思う。14世紀中頃の西ヨーロッパで流行った黒死病と森林喪失が無関係であるとは思えない。黒死病が蔓延した後、西ヨーロッパの支配者層は新たな統治制度の設立に向かう。そして統治者(法の執行者)が自身の立法権を求めるようになる。近代主権国家はその具現である。

(12世紀の西ヨーロッパで、穀物生産量の増大と人口増の下で物品貨幣が消滅する。他方、財貨が物品貨幣の利息を継承した。すなわち、財貨に金利が生じる。筆者には、利息が物品貨幣から財貨に移行する経緯を上手く説明できないが、銀行間取引等の下で変動する現代の金利＝資本的使用価値とは異質な「金利」である。すでに述べたが、古来、財貨は土地や奴隷の交換手段＝売買手段である。おそらく、三圃式農業の下で土地＝農地の再生産性が常態化し、財貨が物品貨幣の利息を継承して金利が生じた。徴税請負人が家畜や穀物を販売する商人であったことが、間接的にそれを証明している)

5. 4 フランスとイングランドの動向

1135年にイングランド王ヘンリー1世が死去し、その後イングランドとノルマンディー地方が無政府状態に陥る。内乱は約20年続いた。そして1154年、ヘンリー2世がイングランド王に即位し、王位がノルマン朝からプランタジネット朝に変遷する。

ヘンリー2世は父方のアンジュー、メーヌ、トゥーレーヌのフランス各地、および母方のノルマンディー地方とイングランド、アイルランドの一部を相続した。さらにフランス王ルイ7世と離婚したアリエノールと結婚してアキテーヌ地方を共同支配する。すなわち、ヘンリー2世は、現在のフランス国土の約半分を支配し、イングランドとアイルランドの一部も支配する。

(フランスは、ロワール川中流域を境にして北フランスと南フランスに分けて見ることができるが、当時のカペー朝王権は南フランスにあまり浸透していない。したがって、フランス王の支配地域は意外に狭い。ヘンリー2世が相続した領地は概ね北フランス西部で、アリエノールの領地＝アキテーヌ地方は概ね南フランス西部である)

1160年、フランス王ルイ7世はヘンリー2世の求めに応じ、娘のマルグリットをヘンリー2世の次男ヘンリー(若ヘンリー)に嫁がせる。後のフランス王フィリップ2世はまだ誕生していない。すなわち、当時のルイ7世に嗣子がいなかった。若ヘンリーとマルグリットの結婚は、若ヘンリーの次期フランス王即位を意味する。ヘンリー2世はルイ7世より13歳若い。彼は、自身の存命中にプランタジネット朝フランス王国が具現する、と考えていたかもしれない。

だが1165年、後のフランス王フィリップ2世が誕生し、ルイ7世は嗣子を得る。若ヘンリーがフランス王に即位する可能性が消えた。ヘンリー2世はがっかりしたと思う。しかし彼は有能な王であった。プランタジネット朝フランス王国の夢を失ったヘンリー2世は、プランタジネット朝イングランド王国の開国(すなわちフランスからの独立)を目指す。

1166年、ヘンリー2世は領内の官僚機構を再構築してイングランドの支配体制を強化する。具体的には、イングランドの封建制を契約関係から主従関係に変更し、司法制度を整備して無政府状態の再発を防止する。

主従関係は恩貸地を保有する諸侯の存在を明確にした。イングランド王に従軍しない諸侯は領地や財貨を代納しなければならなくなる。他方、司法制度の整備は聖職者を司法の場から排除する政策であった。この司法制度整備が陪審員制のはじまりになるが、カンタベリー大司教ベケットが反発する。そしてヘンリー2世下の騎士たちがベケットを殺害するという「事件」が勃発した。ヘンリー2世は、ローマ教皇に謝罪して破門を逃れた。その後イングランドのカトリック教会領が国王の治外法権領になり、ヘンリー2世とローマ教皇庁の関係が親密になる。

イングランドの支配体制を強化した後、ヘンリー2世はアイルランドの支配体制も強化する。1171年、ヘンリー2世は大軍を率いてアイルランドに侵攻し、ダブリン王を封臣にして総督府を置く。

イングランドとアイルランドの支配体制を強化したプランタジネット家＝アンジュー家はヨーロッパ最大の領地支配者になった。そして、おそらくこの頃から、ヘンリー2世はローマ教皇にイングランドを寄進してプランタジネット朝イングランド王国(あるいはアンジュー朝ノルマンディー王国)の開国を目指すようになる。しかし、彼の家族はフランスからの独立など望んでいなかったし、カペー家＝フランス王家との争いも望んでいなかった。

1169年にヘンリー2世とルイ7世がモンミラーユで交わした約定により、次男ヘンリーの北フランス西部とイングランドの相続が決まっていた。また、マルグリットと結婚した彼は義父ルイ7世に臣従していた。そして三男リチャードは、母親アリエノールから南フランス西部＝アキテーヌ地方を相続することが決まっていたし、それはアリエノールが望んでいたことでもあった。しかも四男ジェフリーはブルターニュ公家に婿入りして豊潤なブルターニュ地方(ノルマンディー地方に隣接する北フランス西部の地方。古代ローマ帝政期の「ブリタニア」はブルターニュ地方も含んでいた)の領主になる道ができていた。彼らにとって、フランスからの独立やカペー家との争いは馬鹿げたことであり、フランス王との信頼関係を高めるほうが重要である。

1173年、三人の息子(次男ヘンリーと三男リチャード、四男ジェフリー)と妃アリエノール、さらに彼らを支持する諸侯たちが反乱を起こす。ちなみに、当時1歳の五男ジョンが相続する領地はなかったが、ヘンリー2世は1177年にローマ教皇からアイルランドの領主権＝ロードシップをジョンに与える許可を得ている。

(ヘンリー2世は「立法者」ではない。にもかかわらず、ヘンリー2世が封建制を契約関係から主従関係に変更したことも反乱の温床であったと思う。とりわけアキテーヌ地方の諸侯たちは、フランス王に臣従するつもりはなかったが、イングランド王に臣従するつもりもなかった。彼らにとって、国王は隣接するナバラ王国の名君サンチョ6世のほうが望ましかったとさえ言える。アリエノールは彼らの心情を理解していた。ただし、ガスコーニュ＝アルマニャック地方の諸侯たちはフランス王に臣従していた。彼らがアリエノールの宗主権を認めていたとは思えない。ちなみに、南フランス西部はロワール川中流域以南からガロンヌ川以北までがアキテーヌ地方で、ガロンヌ川以南がガスコーニュ地方である。南フランスの面積は概ね日本の九州と同じで、アキテーヌ地方を福岡県と佐賀県、長崎県に置き換え、ガスコーニュ地方を熊本県と鹿児島

島、南フランス東部のトゥールーズ地方を大分県と宮崎県に置き換えると分かりやすい)

ヘンリー2世は家族の反乱を鎮圧した。そして1189年に死去する(ヘンリー2世が死去する前に次男ヘンリーと四男ジェフリーが死去している。他方、1180年にルイ7世が死去し、フィリップ2世がフランス王に即位している。ちなみに、ヘンリー2世の四男ジェフリーは1181年にブルターニュ公に即位したが、父ヘンリー2世に反抗したため、フランス王フィリップ2世の元に身を寄せていた。次男ヘンリーは病死したが、ジェフリーの死因はフィリップ2世が開催した馬上槍試合で得た負傷である)。

ヘンリー2世の死後、ブルターニュ地方とアイルランドを除くすべての領地を三男リチャードが相続する。リチャードはイングランド王リチャード1世に即位した。そして、フランス王フィリップ2世とともに第3回十字軍遠征に従軍する。

第3回十字軍遠征についてはすでに述べたが、リチャード1世はパレスチナに向かう途中シチリア王国に立ち寄っている。そして当時のシチリア王タンクレディと争い、メッシーナを占領した。1189年にグリエルモ2世が死去してタンクレディがシチリア王に即位したことはすでに述べたが、グリエルモ2世の妃はリチャード1世の妹ジョーンである。タンクレディは、メッシーナ返還の見返りにジョーンと彼女の持参金2万マルク=2万マルクを返す。さらにジェフリーの遺子アーサーをシチリア王の後継にすると文書で約束した。

(当時のリチャード1世は金に困っていた。彼は遠征前にスコットランドの独立を認め、見返りにスコットランド王ウィリアム1世から1万マルクの軍資金を得ている。ジョーンの持参金2万マルクも必要な軍資金であった。しかしアーサーをシチリア王の後継にしたのは余計であった)

当時、リチャード1世はフィリップ2世の異母姉アデル(次男ヘンリーの妻マルグリットの妹)と婚約していた。だが、母親のアリエノールがナバラ王サンチョ6世の娘ベレンガリアを伴ってシチリアを訪れ、彼女との結婚を迫る。その頃、フィリップ2世もシチリアに立ち寄っている。リチャード1世は、フィリップ2世に臣従を誓約し、見返りにアデルとの婚約を破棄する(コラム29)。

歴史家たちは、リチャード1世がアデルとの婚約を破棄したことが、フィリップ2世がアッコ陥落後に帰国した理由である、と論じている。だが、フィリップ2世は賢明な国王である。リチャード1世とベレンガリアの結婚には外交上の意味があり、フランスの安全にも寄与すると理解したはずである。それでもフィリップ2世の帰国に情緒的な理由があったとすれば、おそらくジョーンである。当時、フィリップ2世は妃のイザベルを亡くしていた。フィリップ2世が、幼なじみのジョーンとの再婚を望んだ可能性がある。リチャード1世は同意したかもしれないが、おそらくジョーンが同意しなかった(あるいは、アリエノールが反対した。ジョーンは南フランス東部のトゥールーズ伯レーモン6世と再婚する)。

その後リチャード1世はキプロスを占領してエルサレム王国に売却し、ベレンガリアと結婚式を上げてパレスチナに赴く。リチャード1世はアッコ陥落後もサラフディーンと戦い続けるが、1192年に休戦協定を結び帰国する。だが、すでに述べたように、帰路の途中でドイツ皇帝ハインリヒ6世に捕らえられた(実際にリチャード1世を捕縛したのはオーストリア公レオポルト5世であるが、彼はハインリヒ6世の手下にすぎない)。

アリエノールがドイツに赴き、15万マルクの身代金を支払ってリチャード1世を解放したと伝えられているが、ハインリヒ6世がリチャード1世を捕縛した目的は身代金ではない。目的はシチリア王位である。すでに述べたように、ハインリヒ6世はシチリア王に即位しようとしていた。したがって、リチャード1世がタンクレディから獲得したアーサーのシチリア王位継承権を取り消す必要があった。

フィリップ2世は、リチャード1世を解放しないよう、ハインリヒ6世に要請した。他方、ジョンがイングランド王位を狙う。解放されたリチャード1世はいったんイングランドに戻り、ジョンを説き伏せる。そしてローマ教皇にヒューバート・ウォルターのカンタベリー大司教就任を要請し、彼にイングランドの統治を委ねる。その後大陸=フランス本土に戻り、フィリップ2世と会戦する。

結局、ヘンリー2世が目指したように、リチャード1世もプランタジネット朝イングランド王国(あるいはアンジュー朝ノルマンディー王国)の開国を目指す。ただし、ヘンリー2世とちがいで、ローマ教皇庁はサラフディーンと戦ったリチャード1世に一目置いていた。また義父のナバラ王サンチョ6世の支援を当てにすることもできた。しかも1197年にハインリヒ6世が死去し、ローマ教皇インノケンティウス3世がシチリアを含むイタリア全土を支配している。

情勢はリチャード1世が圧倒的に有利で、フィリップ2世は苦戦を強いられた。だが1199年、リチャード1世は死去する(鎧を脱いだときに肩に刺さったクロスボウの矢が死因である、と伝えられている)。

リチャード1世は、ジョンにイングランド王が務まると思っていなかった。だが、ジョンを後継指名しないのであれば、アーサーを指名するしかない。しかしアーサーはフィリップ2世に臣従している。リチャード1世は、遺言で弟ジョンを指名し、アリエノールもジョンの即位を承諾する。リチャード1世の死後、カンタベリー大司教ヒューバート・ウォルターがジョンに戴冠する。

1200年、イングランド王ジョンは離婚してアングレーム伯の娘イザベルと再婚する。離婚と再婚の目的は、ブルターニュ諸侯の支持を得てアーサーを孤立化させることであった。だが、ブルターニュの諸侯たちはジョンを支持しない。彼らは、アーサーがイングランド王に即位するほうが望ましいとさえ考えていた。アンジュー、メーヌ、トゥーレーヌの諸侯たちも同様であった。しかも厄介なことに、イザベルはジョンと結婚する前にラ・マルシュ伯ユーグと婚約していた。

1202年、フィリップ2世はジョンを法廷に呼び出す。理由は結婚問題である。だがジョンは出廷しない。フィリップ2世は、ジョンの領地をすべて没収し、アーサー(フランス名アルチュール)に与えると宣言した。

結局、ジョンもプランタジネット朝イングランド王国の開国を目指す。

ジョンは大陸＝フランス本土に渡り、アーサーを幽閉する(その後のアーサーの行方は不明であるが、おそらくジョンが殺害した)。それでもブルターニュ地方とアンジュー、メーヌ、トゥーレーヌの諸侯たち、すなわち北フランス西部の諸侯たちはジョンを支持しない。アリエノールが支配していたアキテーヌ地方の諸侯たちもジョンを支持しない。

アリエノール(イギリス名エレノア)はフォントヴロー修道院に隠遁し、1204年に死去する。そしてカンタベリー大司教ヒューバート・ウォルターが1205年に死去する。その後後任のカンタベリー大司教をめぐる争いがあり、ローマ教皇インノケンティウス3世はジョンを破門する。破門されたジョンは、イングランドのカトリック教会領を没収し、軍備を増強してフランス領の奪還を目指す(イングランドの諸侯たちもジョンの即位を支持していなかった。おそらくジョンは、イングランドを統治する上で新たな土地を各諸侯に分配する必要がある、と判断したように思う)。

1208年、ドイツ皇帝フィリップが死去し、オットー4世がドイツ皇帝に即位する。ジョンとオットー4世は幼なじみで気心が知れている(ザクセン公ハインリヒが妻マチルダとヘンリー2世の元に身を寄せていた頃、幼いオットー4世も父母といっしょに身を寄せていた)。軍備を増強したジョンはイングランド全土をローマ教皇に寄進するという「大嘘」をつき、破門を解く。そしてフランスに侵攻する。

ジョンとオットー4世の挟撃作戦は成功するかのように見えたが、1214年のブーヴィーヌの戦いでフランス軍に大敗する。ジョンはイングランドに戻り、オットー4世は帝位を失う。その後ジョンは諸侯たちに多数の特許状(この多数の特許状が大憲章＝マグナ・カルタである)を与えることを強いられる。イングランドの封建制が主従関係から契約関係に戻るが、ジョンは「大嘘」を根拠にローマ教皇の臣下としてイングランドの王権を再度強化しようとする。内戦＝第一次バロン戦争が勃発し、諸侯たちはフィリップ2世の長男ルイを迎え入れた。

1216年、イングランド王ジョンが死去する。他方、ルイがイングランドの統治に失敗する。ルイは諸侯たちとランベス条約(1217年)を結び、フランスに帰国する。そしてジョンの嫡子ヘンリーがイングランド王ヘンリー3世に即位する。他方、フィリップ2世の死後、イングランドから帰国したルイがフランス王ルイ8世に即位するが、約3年後に死去する。その後彼の嫡子ルイがフランス王ルイ9世に即位する。

前節と本節で西ヨーロッパ諸国(ドイツとイタリア、フランスとイングランド)の歴史(10世紀後半～12世紀後半の歴史)を長々と述べたが、村落共同体＝農村や商工都市＝中世都市の誕生に関する記述を除けば、内容が本書の主旨からかなり離れている。

しかし12世紀後半～16世紀後半は「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期が重畳した時代である。前節と本節の内容は、この「重畳」を認識する上で必要な予備知識である。次節で東ヨーロッパ諸国とロシアの動向を論じるが、目的は前節や本節と同様である。退屈な読書になるかもしれないが、しばらく付き合っていたいただきたい。

前節の終わりで述べたように、「広義の中世」の突破期後半(10世紀後半～12世紀後半)は「古きよき法の時代」ではじまり、商品経済が進展して家畜や穀物が商品化する時代で終わる。物品貨幣であった家畜や穀物が容易に財貨に転化するようになり、領地の争奪が激化した。そしてヨーロッパの国王や諸侯たちの仕事もつぱら戦争になる。彼らは領地を拡大するために戦争をはじめ、軍備を強化するためにより多くの財貨を必要とした。

ローマ教皇庁も領地を求めるようになる。ローマ教皇インノケンティウス3世は、イタリア全土を所領化し、「異教の地」の所領化も目指す。東ヨーロッパでは、西ヨーロッパ以上に領地争奪が激化した。

コラム29: 女傑アリエノールの夢

西ゴート人もアラブ人も、フランク人もピレネー山脈のバスク地方を支配できなかった。そして在住のバスク人が9世紀に建国した王国がナバラ王国である。サンチョ6世は優れた王であった。他方、アリエノールは、ナバラ王国と南フランス(アキテーヌとガスコーニュ、トゥールーズ)がひとつになった新たな王国の夢を見ていたように思う。彼女にとって、ロワール川中流以北(北フランス西部やイングランド)は不要で、息子のリチャード1世は彼女の夢を実現する「道具」である。

むしろリチャード1世も彼女と同じ夢を見ていたように思う。時代は貨幣経済の時代から貨幣経済と商品経済の時代に変遷しつつあったが、ジェフリーが婿入りしたブルターニュ地方を除けば、アリエノールにもリチャード1世にも、そしてサンチョ6世にも領土的野心はなかった。もしも「アリエノールの夢」が実現していれば、英仏百年戦争が勃発する場面はなかったかもしれない。

(当時のヨーロッパで、領土的野心のもっとも強い人物は、ローマ教皇インノケンティウス3世である。本文で、ジョンの寄進を「大嘘」と書いたが、インノケンティウス3世からの要求があったかもしれない。一部の歴史家が、ヘンリー2世はイングランドをローマ教皇に寄進するつもりでいた、と論じている。筆者は、彼らの言説に即して本文を執筆したが、ジョンの「大嘘」は父ヘンリー2世の模倣であった可能性もある。しかしヘンリー2世とちがひ、ジョンに北フランス西部を統治する術はなかった)

ちなみに、ナバラ王国は13世紀にフランスから王を迎え、フランスとの友好を維持しながら存続する。だが16世紀に現在のスペインを建国したアラゴン王フェルナンド2世に併合された。ナバラ王国の歴史は古く、バスク地方(バスク自治州)には今も独立の気運があるが、筆者の見るところ、古代や先史時代の記憶(バスク人はネアンデルタール人の末梢であるとの説がある)よりフランスの王統が長く続いたことのほうが独立の気運を高めているように思う。もしも沖縄で中国の皇統が長く続いていたとすれば、日本もスペインと同様な場面に直面しているかもしれない。

余談であるが、ピーター・オートゥールがヘンリー2世を演じ、キャサリン・ヘプバーンがアリエノールを演じた映画「冬のライオン」は名作であるが、フィクションである。

5.5 東ヨーロッパの動向

多くの聖職者と封建諸侯が、ドイツ皇后テオファヌを敬愛していた。オットー2世の死後、テオファヌがドイツ帝国の執政を担う。テオファヌは戦争を嫌い、平和を愛した。テオファヌは991年に死去するが、成人したオットー3世(オットー2世とテオファヌの嫡男)が母の意思を継ぐ。

当時、ザクセン朝ドイツ帝国とカペー朝フランス王国の関係は良好で、ボヘミア公国(現在のチェコ共和国)はドイツ帝国の優等生であった。したがって、ハンガリー王国およびポーランド王国との友好および同盟がオットー3世の外交課題になる。

西暦1000年、ドイツ皇帝オットー3世はハンガリーとポーランドの独立を認め、さらに同盟を結ぶ。そしてカトリック大司教座の設置を認め、アールパード朝ハンガリー王イシュトヴァーン1世(在位997~1038年)とピャスト朝ポーランド王ボレスワフ1世(在位992~1025年)の戴冠も認める(すなわち、オットー3世はハンガリー王国とポーランド王国の「開国」を認めた)。

オットー3世の承認を得たイシュトヴァーン1世はただちに戴冠して王権を強化し、スロヴァキア(概ね現在のスロヴァキア共和国)やトランシルヴァニア(概ね現在のルーマニア中西部)地方を占領する。だが、ボレスワフ1世はただちに戴冠しない。ボレスワフ1世は、死の直前によく戴冠する。

コラム21で述べたが、ボレスワフ1世の父メシュコ1世はボヘミア公国の公女ドゥブラフカを娶っている。すなわち、ボレスワフ1世の母親はドゥブラフカで、ボレスワフ1世はボヘミア公国も自身の所領であると考えていた(あるいは、隣接するシレジア地方はポーランド領であり、奪還しなければならないと考えていた)。

1002年、オットー3世が死去する。オットー3世の死後、ボレスワフ1世はドイツ帝国との同盟を破棄してボヘミア公国に侵攻する。プラハを占領したボレスワフ1世は、「ボヘミア公ボレスワフ4世」と称し、ボヘミア公国を支配する。当然、ドイツ帝国は反撃する。長い戦争が続き、1018年によく和議が成立した。その後ボヘミア公位がプシェミスル家に戻る。

(ボヘミア公国はヴァーツラフ1世(在位921~935年)の代にキリスト教国としての地位を確立し、ドイツ帝国の宗主権を受け入れた。とはいえ、内乱と骨肉の争いが耐えなかった。ボヘミア公位がプシェミスル家に戻った後も内乱と骨肉の争いがしばらく続く。また、シレジア(ドイツ名シュレージェン)地方の領有をめぐるポーランドとの争いも続いた)

1076年、ポーランド王ボレスワフ2世がローマ教皇グレゴリウス7世から戴冠を授与する。しかし1079年にクラクフ司教スタニスワフを殺害したため、ポーランド貴族たちは彼を国外追放した(事件の原因は不明であるが、スタニスワフに「非」があったかもしれない。だが、スタニスワフは人望が厚く、ポーランドの貴族たちはボレスワフ2世を国外追放した)。

ボレスワフ2世追放後、彼の弟ヴワディスワフ1世がポーランドの統治を担うが、ポーランド王に即位できない。他方、「カノッサの屈辱」に耐えたドイツ皇帝ハインリヒ4世がボヘミア公ヴラチスラフ2世にボヘミア王位を与える。ハインリヒ4世は、ポーランド王位もヴラチスラフ2世に与えた。ヴワディスワフ1世は、ヴラチスラフ2世に臣従し、彼の長女ユディタを娶る。ポーランドはボヘミアの支配下に入った。

1092年、ボヘミア王兼ポーランド王ヴラチスラフ2世が死去する。彼の死後、4人の息子たちが王位を争う。ボヘミアとポーランドの王位が空位になり、ボヘミアは無政府状態に陥る。他方、ポーランドでヴワディスワフ1世の嫡子ボレスワフ3世(在位1102~1138年)が「大公」に即位する。

ポーランド大公ボレスワフ3世は1109年のフントシュベルトの戦いでドイツ皇帝ハインリヒ4世率いるドイツ軍を破り、オーデル川(ドイツとポーランドの国境を流れる大河。ポーランド名オドラ川)からヴィスワ川(ポーランドのクラクフとワルシャワ、グダニスクの中心を流れる大河)までの広大な土地を奪還する。

ハインリヒ4世と戦争を繰り返したボレスワフ3世がポーランド王に即位する場面はなかった。ハインリヒ4世の死後、ボレスワフ3世は新ドイツ皇帝ロタール3世と和睦し、ポーランドを5分割して5人の息子たちに与え死去する。その後ポーランドの分裂状態が長期化するが、他方、ボヘミアではオタカル1世(在位1192~1230年)が即位して無政府状態を解消する。そしてオタカル2世(オタカル1世の孫。在位1253~1278年)の代に転機が訪れる。

ハンガリーでは、1038年にイシュトヴァーン1世が死去する。イシュトヴァーン1世の死後、内紛が続く、異民族や異教徒との戦いも勃発した。しかしラーズロー1世(在位1077~1095年)の代に統一を回復する。ラーズロー1世の死後、ハンガリー王に即位したカールマン1世(在位1095~1116年)がクロアチアを占領し、さらにヴェネツィアからアドリア海沿岸のダルマチア地方を奪取して版図を拡大する。

カールマン1世は統一を維持しながら版図を拡大したが、彼は大きな間違いをふたつした。ひとつは、弟のアールモシュと彼の息子を盲目にして修道院に軟禁したことである。もうひとつは、先妻フェリチアの死後、キエフ大公ウラジーミル2世の娘エヴフィミヤと再婚したことである。

かつてアールモシュが反旗を翻した場面があった。しかしカールマン1世が彼と彼の息子を盲目にして軟禁したのは、自身の長男に王位を継がせるためである(ハンガリーには、「王の息子より年上である王家の年長者が王位を継ぐ」という慣習がある)。また、カールマン1世はエヴフィミヤと再婚したが、当時のカールマン1世は高齢でしかも病身であった。そのためエヴフィミヤは不貞を働く。カールマン1世はエヴフィミヤを離縁してキエフに送り返すが、その後エヴフィミヤは男子をひとり出産する。カールマン1世は認知しなかったが、後にこの男子=ボリスがハンガリー王即位を目指す。

名君カールマン1世はエヴフィミヤと再婚した3年後に死去する。カールマン1世の死後、彼の長男イシュトヴァーン2世(在位1101~1131年)が即位する。イシュトヴァーン2世は約30年の在位期間を無難に過ごしたが、嫡子がいなかった。イシュトヴァーン2世の死後、アールモシュの息子ベーラ2世(在位1131~1141年)が即位する。

だが、エヴフィミヤが出産したボリスがハンガリー王位の継承を主張し、ポーランド大公ボレスワフ3世の支援を得て侵攻を繰り返す。盲目のベーラ2世を彼の妃イロナが支え、彼女の兄ベロシュがハンガリー軍の総司令に就任して奮戦する。1135年、ボレスワフ3世がドイツ皇帝ロタール3世と和睦したため、強力な後ろ盾を失ったボリスはハンガリー王位を諦めた(ベーラ2世の姉たちが嫁いだオーストリア公やボヘミア公がロタール3世のドイツ皇帝即位を支持していた。当然、ロタール3世はベーラ2世を支持する。他方、ロタール3世と和睦したボレスワフ3世はボリスを支援できない)。

ボリスの王位篡奪を阻止したベーラ2世はボスニアを占領する。だが、ボスニアはビザンツ帝国の版図である。ベーラ2世の死後、彼の長男ゲーザ2世が即位するが、ボスニア奪還を目指すビザンツ皇帝マヌエル1世下のビザンツ軍がハンガリーに侵攻する。ハンガリーはボスニアとダルマチアを失い、ビザンツ帝国の属国になる。

ゲーザ2世の死後、彼の長男イシュトヴァーン3世が即位する。だが、ゲーザ2世の二人の弟が存命していた。上で述べたように、ハンガリーには男系年長者相続の慣習がある。マヌエル1世下のビザンツ軍が再度ハンガリーに侵攻し、ゲーザ2世の弟ラースロー2世が即位する。しかしラースロー2世は急死する(暗殺された可能性がある)。

ラースロー2世の死後、ゲーザ2世のもうひとりの弟が即位するが、ドイツ皇帝フリードリヒ1世の支援を得たイシュトヴァーン3世が王位を奪還する。しかしビザンツ皇帝マヌエル1世はハンガリーの属国化を諦めない。結局、ハンガリーはクロアチアとダルマチア、ボスニアを失い、1172年にイシュトヴァーン3世が死去する。そして彼の弟ベーラ3世が即位する。

ゲーザ2世は、幼少期のベーラ3世をコンスタンティノープルに送っていた。彼はマヌエル1世の下で育つ。いわゆる「人質」であったが、聡明な人物で、嫡子に恵まれなかったマヌエル1世は溺愛したらしい。もしもアレクシオス2世が誕生しなければ、ビザンツ皇帝に即位していたかもしれない。だが1169年にアレクシオス2世が誕生したため、帰国してハンガリー王に即位する。

むろん後押ししたのはマヌエル1世である。「ビザンツの知」の下でハンガリーが再生した。マヌエル1世の死後、ベーラ3世(在位1172~1196年)はボスニアとセルビア、クロアチア、ダルマチアを奪還し、ハンガリーの版図を拡大する。ベーラ3世の死後、彼の長男イムレ1世が即位するが、1204年に死去する。その後彼の弟アンドラーシュ2世(在位1205~1235年)が即位する。

ベーラ3世は奪還したボスニアとセルビア、クロアチア、ダルマチアをすべて王領化した。ハンガリーの版図の約7割が王領になるが、アンドラーシュ2世は王領を貴族や教会に分配する。他方、鉱山を開発して財政を強化する(カルパティア山脈には良質な金山や銀山が多数存在する)。アンドラーシュ2世の死後、彼の長男ベーラ4世(在位1235~1270年)が即位し、ハンガリーに転機が訪れる(コラム30)。

ところで、現在のドイツの首都はベルリンであるが、「広義の中世」の突破期後半(10世紀後半~12世紀後半)のベルリンは湿地帯でスラヴ系のヴェンド人が暮らしていた。彼らは独自の信仰と文化を持ち、エルベ川以東からオーデル川流域、およびヴィスワ川流域のキリスト教徒と対立していた。すなわち、当時のドイツ帝国はエルベ川以西が事実上の版図であった。

ドイツ帝国はエルベ川以東とオーデル川流域、ヴィスワ川中下流域(ヴィエルコポルスカやポモージェ、西ポモージェ地方)の支配を目指す。とはいえ、ザクセン朝やザーリアー朝期のドイツ帝国の行動は穏やかであった。しかし、1144年にローマ教皇エウゲニウス3世が第2回十字軍遠征を呼びかけた場面で、ホーエンシュタウフェン朝ドイツ帝国はヴェンド人が住むエルベ川以東の武力支配と布教を提案する。エウゲニウス3世が提案を認め、第2回十字軍遠征と並行して「ヴェンド十字軍」の遠征がはじまる。ドイツ皇帝フリードリヒ1世の盟友ザクセン公ハインリヒも従軍した。そしてリューベクをホルシュタイン伯アドルフから強奪し、オルデンブルクの司教座を移す。

ザクセン公ハインリヒがリューベクに司教座を移した目的は、ヴェンド人の改宗である。にもかかわらず、彼はリューベクに特権を与え、カトリック教会の市政関与を禁じている。おそらく、リューベク在住のドイツ移民(大多数が商人である)が特権を要求した。彼らは、リューベクを後述するノヴゴロドのような都市にすること、すなわち「共和制」を望んだように思う。ザクセン公ハインリヒは共和制を容認した。その後彼を追放したドイツ皇帝フリードリヒ1世もリューベクの特権を追認する。リューベクはフリードリヒ2世の代に帝国都市(事実上の都市国家)になり、ハンザ同盟を形成する。

他方、デンマーク王ヴァルデマー1世下のデンマーク艦隊がヴェンド人の聖地リューゲン島(現在のドイツ最大の島。面積は佐渡島より少し大きい)を襲撃する。リューゲン島のヴェンド人は抵抗したが、やがて屈服する。その後ヴァルデマー1世の側近であったロスキレ司教アブサロンがリューゲン島での布教と統治に携わる。アブサロンは武力行使しながらヴェンド人を懐柔した。多くの血が流れる場面もあったが、エルベ川以東からオーデル川流域、およびヴィスワ川中下流域のキリスト教化とドイツ帝国化が具現する。

ヴィスワ川以東のバルト海沿岸でもキリスト教の布教とドイツ帝国化の試みが続いていた。1199年、リヴォニア司教に就任したアルベルトがローマ教皇インノケンティウス3世に「北方十字軍」遠征を提案する。理由は、アルベルトが赴任する前の司教が在任のリーヴ人(フィン・ウゴル系部族)に殺害されたためであるが、とはいえリーヴ人から見ればドイツ帝国とキリスト教徒は侵略者である。しかしインノケンティウス3世はイタリア全土を一時支配した野心家で、イングランドの教皇領化を試み、第4回十字軍遠征を呼びか

けアルビジョア十字軍遠征も呼びかけた「狂人教皇」である。他方、商品経済の下で家畜や穀物の「商品」化が進展し、当時の支配者層の領土的野心が異様なくらいに膨らんでいた。ローマ教皇インノケンティウス3世はアルベルトの提案を承諾する。

北方十字軍遠征後、アルベルトはダウガヴァ川河口付近のリガ（現在のラトビア共和国の首都）に要塞を建設してユクスキュルから司教座を移し、刀剣騎士修道会を編成して兵員を常設する。1206年、リーヴ人がリガ近郊のホルメを襲撃するが、刀剣騎士修道会と十字軍が進軍して撃退する。その後リーヴ人がキリスト教に改宗し、他のフィン・ウゴル系部族（レット人やライデン族、ヴェンデン族）もキリスト教に改宗した。

しかし彼らがキリスト教に改宗したのは、東南のリトアニア人（バルト・フィン系部族）を恐れ、ドイツ帝国に頼ろうとしたからである。1207年、リトアニア人がダウガヴァ川中流域を襲撃する。刀剣騎士修道会と十字軍、キリスト教に改宗したリーヴ人や他の部族が反撃し、リトアニア人は撤退した。その後アルベルトはドイツに一時帰国し、ドイツ皇帝フィリップから辺境伯の地位を得る。すなわち、アルベルトは封建諸侯になる。そして北方のエストニア支配を目指す。

1215年、アルベルト率いる大軍がエストニア南部に侵攻する。アルベルトは多数のエストニア人（バルト・フィン系部族）を殺戮し、エストニア南部を支配した。その後アルベルトはエストニア北部の支配も目指す。しかし隣接するロシア諸侯やギリシャ正教会の反発は必定である。そこで、デンマーク王ヴァルデマー2世に海上からの侵攻を依頼する。

1219年、デンマーク艦隊がエストニア北部を襲撃し、現在のエストニア共和国の首都タリンを占領する。デンマーク艦隊はエストニア西部のサーレマー島（ドイツ名エーゼル島。面積は沖縄本島より少し大きい）も襲撃したが、在住のエストニア人に反撃され苦戦する。アルベルトが援軍を送り、デンマーク軍は危機を脱した。

1229年、多数の異教徒（リーヴ人やエストニア人）を殺戮し、エストニアを含む「リヴォニア」を支配したアルベルトが死去する（当時のドイツ帝国は現在のラトビア共和国とエストニア共和国、その周辺を「リーフランド」と呼んでいたが、アルベルトはカトリック教会の正式名称として「リヴォニア」という名称を使った）。

12世紀後半頃までに、家畜や穀物が物品貨幣から「商品」になり、経済空間に商品経済が生成する。そして10世紀後半～12世紀後半の東欧三国（チェコ、ポーランド、ハンガリー）が野心を剥き出しにして領地争奪を繰り返す。ドイツ帝国とカトリック教会は「異教の地（概ね現在のバルト三国）」に侵略して殺戮を繰り返した。

現在のロシアやウクライナでも変化が生じた。966年、キエフ大公スヴャトスラフ1世がハザール・カガン国を征服し、その後ブルガリア帝国を征服してビザンツ帝国に侵攻したことはすでに述べたが、スヴャトスラフ1世が征服したハザール・カガン国にペチェネグ人が侵入する。ビザンツ軍に敗北したスヴャトスラフ1世は、ドニエプル川河口付近でまで後退したが、ペチェネグ人に襲撃されて死去する。

スヴャトスラフ1世の死後、彼の長男ヤロポルクが即位する。ヤロポルクは次男オーレクを殺害して地位を固めようとするが、三男ウラジーミルがノヴゴロド（イリメニ湖付近の都市。ヴォルホフ川がイリメニ湖とラドガ湖をつなぎ、ラドガ湖から流れるネヴァ川がサンクトペテルベルク市内を通過してバルト海に注いでいる）で兵をヴァリャーグ兵を集め、キエフに進軍してヤロポルクを倒す。

キエフ大公に即位したウラジーミル＝ウラジーミル1世は、ノヴゴロドで集めたヴァリャーグ兵をビザンツ皇帝バシレイオス2世に送り、彼の即位を助けた（報酬を要求するヴァリャーグ兵たちを厄介払いしたとの説もあるが、彼らはバシレイオス2世の即位に大いに役立った。その後の彼らの消息は不明であるが、ビザンツ軍の中樞に配属されて活躍したように思う）。

その後ウラジーミル1世はギリシャ正教に改宗し、次のキエフ大公ヤロスラフ1世がペチェネグ人を討伐してキエフ大公国の版図を最大化する。他方、ペチェネグ人に代わりキプチャク人（ポロヴェッツ人）がドニエプル川とドニエプル川の下流からカスピ海に注ぐヴォルガ川までの草原＝キプチャク草原を支配する。ヤロスラフ1世の死後、彼の弟や息子たちが交互に即位するが、キプチャク人との戦争がキエフ大公の責務になる。

1113年、フセヴォロド1世の長男ウラジーミルがキエフ大公ウラジーミル2世（在位1113～1125年）に即位する。ウラジーミル2世は、バシリカ法典を模倣して「モノマフ法典」を編纂し、封建制を確立してキプチャク人との戦闘を繰り返す。

ウラジーミル2世は、自身を「ウラジーミル2世モノマフ」と呼んだ。「モノマフ」は「モノマコスの孫」という意味である。ウラジーミル2世の父フセヴォロド1世はヤロスラフ1世の三男であったが、母親はビザンツ皇帝コンスタンティノス9世モノマコスの娘である。

ウラジーミル2世は、ビザンツ帝国を模倣してキエフ大公国にテマ制＝軍管区制を導入し、プロノイア制＝恩貸地制も導入する。西ヨーロッパより約1世紀遅れたが、ロシア・ウクライナでも村落共同体＝農村が誕生した。だが、ウラジーミル2世の死後、各軍管区が公国に戻る。すなわち、各軍管区が独立した（コム31）。

（ヤロスラフ1世は5人の息子に領土を分配して死去する。キエフ大公国は5つの公国の連合になったが、その後相続争いが生じ、13の公国の連合になる。ビザンツ帝国を模倣したウラジーミル2世は分裂したキエフ大公国を再統一したと言えるが、彼の死により、キエフ大公国は再度分裂したとも言える）

1125年にウラジーミル2世が死去し、彼の長男ムスチスラフがキエフ大公ムスチスラフ1世に即位する。そして弟たちを各公国に配置した。とはいえ、公国は13ある。したがって、ウラジーミル2世の息子たちがすべての公国に移住したわけではない。キエフ大公ムスチスラフ1世がノヴゴロド公を兼ねた。

当時、ノヴゴロドで貴族＝ボヤーレたちが民会＝ヴェーチェを開き、市長＝ポサードニクを選出していた。しかしムスチスラフ1世は多忙で、ノヴゴロドの民会や市長選出(すなわち「共和制」)を問題視する場面はなかった。だが1132年にムスチスラフ1世が死去した後、前ノヴゴロド公フセヴォロドが復位して共和制を否定する。

1136年、ノヴゴロドで「革命」が勃発し、ノヴゴロドの民衆はフセヴォロドを追放する。革命後、ノヴゴロド公が頻繁に入れ替わり、ノヴゴロド市長やノヴゴロド貴族と対立する場面もあったが、ノヴゴロドの共和制が後退する場面はなかった。

「広義の中世」の突破期後半(10世紀後半～12世紀後半)に、封建制とほぼ同時に共和制も誕生している。後述するが、同時代のユーラシア大陸東部でも封建制と共和制が誕生している。

筆者のレベル4パースペクティブにしたがえば、開墾が進展して商品経済が誕生した。それが、「広義の近代」の出現期であるが、問題は封建制と共和制が混在する社会的空間、および村落共同体＝農村と商工都市＝中世都市が混在する「封建社会」を「広義の中世」の産物と見るか「広義の近代」の産物と見るかである(ちなみに、ここで言う共和制と古代ローマの共和制につながりはない。現代の民主制と古代ギリシャの民主制につながりがないのと同じである)。

歴史家や社会学者の多くが、封建社会は中世の産物である、と論じている。なるほど、封建制は中世帝国で誕生した。だが、制度と社会はちがう。封建制を確立した「高度中世帝国(ビザンツ帝国や南宋)」内で群雄が割拠する場面はなかった。他方、亜周辺で群雄が割拠し、村落共同体＝農村と商工都市＝中世都市が混在する封建社会が誕生する。レベル3パースペクティブを考案した公文氏も同様な考えをお持ちのようだが、中世帝国の「封建制」を中世の産物と考え、亜周辺の「封建社会」を近代の産物と考えるほうが妥当である。しかも最初に共和制が誕生した場所はロシアである。前節で述べたドイツのリューベクは、おそらくノヴゴロドの共和制を模倣した。

(本書の主旨に従えば、封建制や封建社会より物品貨幣の消滅と鉱工業の進展を「広義の中世」の出来事と見るか「広義の近代」の出来事と見るかが重要である。筆者の認識では、物品貨幣の消滅は「広義の中世」の出来事で、鉱工業の進展は「広義の近代」の出来事である。余談であるが、経済学者やエコノミストたちは、物品貨幣と物品貨幣の利息を論じることなく金利を論じる。そのため、彼らは資本主義経済の起源を12～13世紀に置いたり15～16世紀に置いたりする。しかしマルクスは、資本主義経済下の金利に依存して貨幣に資本的使用価値が生じる、と考えた。筆者の認識では、貨幣の資本的使用価値が生じるのは18世紀である。その後産業資本が誕生する。筆者の考えでは、産業資本が誕生した18世紀後半を資本主義経済の起源にすべきである)

コラム30: アールパード朝ハンガリー王国

すでに述べたが、10世紀後半～12世紀後半のヨーロッパ諸国の国王は立法権を有していない。裁判権も有していない。中世の政体は司法府が突出していたが、皇帝＝ドイツ皇帝と教皇＝ローマ教皇が裁判権を有していた。たとえば、ボヘミア＝チェコはドイツ帝国に裁判権を委ね、ポーランドではカトリック教会が裁判を担っていた。ポレスワフ2世がクラクフ司教スタニスワフを殺害した原因は、ドイツ皇帝に忠誠を誓い、ドイツ帝国に裁判権を委ねようとしたためであったかもしれない。

他方、ハンガリーはベーラ3世の代にビザンツ帝国から立法制度と司法制度を「輸入」する。ベーラ3世は国法を制定して執行し、裁判権を行使した(ベーラ3世はボスニアとセルビア、クロアチア、ダルマチア等を奪還したが、国法を重視し、カトリック教会を押し付けるようなことはしなかった。おかげでボスニアとセルビアにギリシャ正教会が残る)。

ベーラ3世は名君であったが、ハンガリー王には名君が多い。ラースロー1世とカールマーン1世は名君であったし、ベーラ3世後のアンドラーシュ2世やベーラ4世も名君であった。アンドラーシュ3世の死後、ハンガリー王家がアールパード家からアンジュー家に変遷するが、アンジュー朝期のハンガリー王も名君が多い。彼らは有能な国家経営者であったが、個人の資質以上にハンガリー王が国法を制定して執行し、裁判権を行使したことのほうが大きいかもしれない。

中世ハンガリー史は、政治家や企業経営者が学ぶに値する「歴史」である。時間のある方にはハンガリー旅行をお薦めしたい。ハンガリーはチェコやポーランドと同様な親日国である。しかも、ハンガリー語はウラル・アルタイ系言語で、文法が日本語の文法に似ている。たとえば、人の名前(姓名)や住所を呼んだり書いたりする順序が日本語と同じである。

コラム31: ハンガリー王国とキエフ大公国の類似性

キエフ大公国はウラジーミル2世の代にビザンツ帝国から立法制度と司法制度を輸入した(ハンガリーもベーラ3世の代に輸入したが、それより半世紀以上早い)。そして、ウラジーミル2世の立法措置と国法の執行がノヴゴロドの共和制を可能にしたように思う(筆者には、後のジョチ・ウルス＝キプチャク・ハン国もビザンツ帝国の統治形態＝法治主義を模倣したように思える)。

「広義の中世」の突破期後半(10世紀後半～12世紀後半)に、ビザンツ帝国の影響下にあったキエフ大公国の大公とハンガリー王国の国王が国法の制定と執行、裁判を担う「立法者」になったのは歴史上の事件である。キエフ大公国とハンガリー王国でキリスト教会が裁判を担う場面がなくなる。

ちなみに、ペチェネグ人はモンゴル系部族の鉄靉であったとの説があるが、確証がない。しかしキプチャク人がトルコ系遊牧民であったことはほぼ間違いない。ウラジーミル2世は83回出陣し、キプチャク人と19回講和したようだが、それでもキエフ大公国とキプチャク人の戦闘が止む場面はなかった。結局、キエフ大公国とキプチャク人の戦争は約150年続く。「イーゴリ遠征物語(岩波書店)」はそのような時代に書かれた物語であるが、キエフ大公国もキプチャク人も疲弊した。そしてモンゴル帝国が「漁夫の利」を得る。

5.6 北宋と遼＝契丹の興亡

「広義の中世」の突破期に、ユーラシア大陸東西の貨幣経済がひとつになる。すなわち、銀が世界通貨になる。その後中世帝国のスキームが瓦解する。12世紀後半から「広義の近代」の出現期がはじまるが、それに重畳して「広義の中世」の成熟期もはじまる。「広義の近代」の出現期と「広義の中世」の成熟期を論じる前に、ユーラシア大陸東部の「広義の中世」の突破期後半、すなわち北宋と遼＝契丹、南宋と金に言及する。

10世紀前半のユーラシア大陸中西部の基軸通貨は銀である。だが、ユーラシア大陸東部では、銀はあまり流通していない。五代十国時代に後晋(936～946年)を開国した石敬瑭は、援軍の見返りに燕雲十六州(現在の北京市、および河北省と山西省の一部)を遼＝契丹に譲渡し、毎年30万匹の絹を贈る約束も交わした。しかし、銀を贈る約束を交わしていない。おそらく、遼＝契丹が銀を要求しなかった。

銀が世界通貨になったのは10世紀後半、あるいは11世紀初頭である。1004年、北宋と遼＝契丹が「澶淵の盟」を結ぶ。澶淵の盟締結後、北宋は毎年20万匹の絹と10万両の銀を遼＝契丹に贈る。当時、2匹の絹と1反の絹織物、1両の銀と1匹の絹がほぼ等価であった。したがって、北宋が銀の歳幣を止め、毎年30万匹の絹を贈っても遼＝契丹が得る歳幣の大きさは同じである。しかし、遼＝契丹は10万匹の絹の代わりに10万両の世界通貨＝銀を要求し、北宋は要求に応じた。

コラム22で述べたように、後周の世宗が廢仏を断行した目的は銅と銅貨の獲得である。北宋期の中国も主要な財貨は銅貨である。したがって、11世紀初頭までに銀が世界通貨になっていなければ、遼＝契丹が10万両の銀を北宋に要求する場面はない。

銀が世界通貨になる場面で大きな役割を担ったのは、西ウイグル王国＝天山ウイグル王国である。先で述べたように、唐朝末期にウイグル部族が西遷してタリム盆地およびジュンガル盆地で西ウイグル王国を建国した。歴史家たちは、西ウイグル王国は遊牧民が定住した画期的な例であると論じている。しかし、遊牧民が農耕民になったわけではない。西ウイグル王国は史上初の「製造業国」である(少し遅れて同時代の大理国も製造業国になる)。

西ウイグル王国の主要農産物は綿花である(穀物も栽培していたようだが、自給率は低かったと思う。西ウイグル王国は北宋から小麦や米を輸入していた)。西ウイグル王国は、インドから種を仕入れて綿花を栽培し、綿織物を製造してユーラシア大陸東西に輸出した。当時、中央アジアの主要な財貨は銀である。西ウイグル王国から綿織物を輸入する国々は銀で代価を支払った。他方、西ウイグル王国は北宋から小麦や米を輸入し、銀で代価を支払った。

綿織物は軽くて丈夫である。しかも毛織物や絹織物とちがい、洗濯ができる。そして、製造拠点がタリム盆地やジュンガル盆地であれば、陸路でユーラシア大陸東西に運べる。西ウイグル王国が製造する多量の綿織物が銀を世界通貨にした。

史上初の製造業国＝西ウイグル王国の建国は9世紀中頃である。西ウイグル王国は綿織物生産の他に冶金＝製鉄も営んだ。

(元衆院議員の栗本慎一郎氏が、著書で、「シルクロードが東西交易ではたした役割はさほど大きくない、草原の道のほうが大きな役割をはたした」と論じている。栗本氏の認識が正しいとしても、栗本氏は西ウイグル王国が製造業国であったこと、そしてシルクロードが「製造業ベルト地帯」であったことを見落としている)

959年、後周の世宗が死去し、翌年、趙匡胤＝太祖が北宋を開国する。そして次の太宗の代に河北の燕雲十六州を除く華北と華中、華南をほぼ統一した。その後北宋は遼＝契丹と敵対する。だが1004年に澶淵の盟を結び、安寧の時期を得る。

北宋も過去の中世帝国＝唐同様、軍政と民政を分割したが、藩鎮の跋扈を憂慮して軍政も民政も中央集権化する。したがって、皇帝の権限は絶大で、官僚機構が肥大化した。

「大きな政府」の北宋は計画経済を推進する。とりわけ1070年に主席宰相に就任した王安石と新法派が行った改革は、「計画経済」と呼ぶにふさわしい。新法派は様々な政策を立案して施行したが、ここでは均輸法と農田水利法、育苗法に着目したい。

均輸法は、国家が版図内の物流を支配し、塩や茶の国家独占販売＝専売を定めた法である。均輸法施行後、北宋は水運と海運、造船業を支配し、塩や茶、酒等を専売化した。物流支配の意義は大きい。専売品目だけでなく、その年の収穫量に応じてコメや小麦等を各地に配分する仕事も官僚の大きな仕事になる(唐も塩等を専売化した。が、物流を支配する場面はなかった)。

農田水利法は国家の灌漑事業を定めた法であるが、たんに治水を促進する法ではない。従来、治水は既存田畑の水利を改善して農産物の収穫量を安定化する土木工事であった。しかし、農田水利法が定める灌漑事業は、新運河の建設や新田の開墾も伴う。すなわち、農田水利法は「農業土木事業促進法」である。農田水利法の下で江南の開墾が進み、また都市周辺の田畑が広がる(したがって、都市から城壁がなくなる。北宋の帝都＝開封に城壁はない。長安や洛陽のような城壁に囲まれた古都は衰退する)。

育苗法は国家が米粃や麦粃を貸出し、その利息を定めた法である。当初、利息は年2割であった(利息の返済は「物納」である。11世紀末～12世紀初頭頃まで、ユーラシア大陸東部＝中国で物品貨幣が残る。中国で物品貨幣が消滅するのは北宋末期か南宋初期である)。

農田水利法の下で開墾した新田は公有地である。青苗法は、開墾した公有地に農民が定着して農耕を行う上で必要な政策であった。だが、青苗法の下で農民が荘園から新田＝公有地に移動すれば、荘園は働き手を失い荒地になる。当然、隋唐時代から荘園を営む貴族たちは青苗法に反対する。青苗法は新法派と旧法派の争点になった(コラム32)。

1074年、河北で大旱魃が起き、旧法派は「新法に対する天の怒りである」と上奏した。王安石は失脚する。だが、青苗法は残る。しかし新法を推進した神宗が1085年に死去し、旧法派の重鎮であった司馬光が復歸して青苗法を廃止する(ちなみに、司馬光は新法をすべて廃止したわけではない。神宗が死去した翌年、王安石も死去する。そして青苗法を廃止した後、司馬光も死去する。司馬光の復歸は新法派を嫌った宣仁太皇太后の意志であったが、司馬光は青苗法以外の新法を廃止していない)。

朝廷が農田水利法の下で開墾した公有地を売却すれば、新法派と旧法派の対立は生じなかったかもしれない。だが、土地は売買可能な財産であるが、「商品」ではない。農税を土地税＝地租等に変更し、国家の下で順序構造＝貨幣経済を維持する仕組みをつくらなければ、公有地売却は容易にやれない。だが、新法派も旧法派も経済空間の構造をパラダイムシフトするところまで考えが及んでいなかった。したがって青苗法を廃止しても、新法派と旧法派の対立は解消しない(神宗が死去し、王安石と司馬光が死去した後も新法派と旧法派の不毛な争いが続く。農税が土地税＝地租等に移行するのは「広義の近代」の突破期である)。

北宋は軍政も民政も中央集権化し、「大きな政府」の下で制度設計を繰り返しながら計画経済を推進した。したがって、神宗が新法派を擁護するのは当然である、とも言える。しかも北宋は1004年に遼＝契丹と澶淵の盟を結んだ後、1044年に西夏と慶暦の和約を結び、毎年15.2万匹の絹と7.2万両の銀、3万斤の茶(1斤は約500グラムである)を西夏に贈っていた。そして深刻な財政難に陥っていた。

西夏の歴史は、唐が現在の寧夏回族自治区でタンゲート系部族の族長に李姓を下賜したときからはじまる。黄巢の乱の鎮圧に尽力したため、唐は族長に定難軍節度使＝夏国公の地位も与えた。しかし北宋が藩鎮を否定したため、夏国公であった李元昊は開国を決意する。李元昊は吐蕃の残存勢力＝青唐王国を攻め、さらに現在の甘肅省に侵攻して北宋の一部を支配する。そして1038年、西夏を開国する。

北宋にとって、慶暦の和約は軍事費の増大を抑制する上で不可欠な和約であった。北宋の国力からすれば、毎年西夏に贈る歳幣はさほど大きくない。しかし、西夏との抗争が北宋を「大きな政府」だけでなく「大きな軍」の帝国にしてしまう。

慶暦の和約後、北宋軍＝禁軍の兵員数が開国当初の3～4倍に増大する。武官数も増大した。官僚＝武官が支配する軍は弱い、縮小は容易でない。神宗が即位した頃の北宋は財政難に陥っていた。神宗の死後、新たに即位した哲宗も新法派を擁護し、次の徽宗も新法派を擁護する。

そして1126年、「靖康の変」が勃発し、その翌年、北宋が滅ぶ。他方、西夏は現在の内モンゴル自治区のオルドス地方(黄河中流域の屈曲部)と甘肅省や青海省の一部を含む広大な領土を獲得した。

(北宋と西夏の抗争が長引いたのは、西夏が領内で産出する塩を国境付近で密売したためである。塩を専売化していた北宋は、慶暦の和約後も多数の兵員を西夏との国境に配置して密売を阻止しなければならなかった。王安石が下野した後、神宗が無謀な西夏遠征を試みたが、塩の密売をなくすには西夏を併合するしかない、と判断したためであるように思う)

ところで、軍政と民政を中央集権化した点で、北宋は画期的な中世帝国であったが、別の理由で遼＝契丹も画期的な中世帝国であった。

遼＝契丹の国教は仏教である。すでに述べたように、仏教は魏普南北朝時代から中国の国教であったが、儒教や道教と併存していた。北宋でも、儒・道・仏の三教が変貌しつつ併存したが、遼＝契丹は国教を仏教に一元する。過去に、隋も国教を仏教に一元したが、天台宗である。しかし遼＝契丹は、陀羅尼信仰に一元した。

「陀羅尼(ダーラニー)」は仏教の呪文の総称である。信仰と無縁な筆者に仏教の解説などできないが、呪文がどのようなものであるかは分かる。呪文は、意味など分からなくても丸暗記して発声すればよいというような、文字の並びである(あるいは「歌」である)。とはいえ、遼＝契丹は当時の文明国であり、先進国である。したがって、陀羅尼信仰が天台宗等の教義と無縁な「呪文」信仰であるとすれば(あるいは「歌謡」であるとすれば)、遼＝契丹は仏教を教学の対象から外し、寺院を統治機構から外した、と言うしかない。すなわち、遼＝契丹は国教会を統治機構から外した。陀羅尼信仰に宗派の区別はおそらくなかった。

「広義の中世」の突破期後半(10世紀後半～12世紀後半)に、国教会の支えが不要になるくらいに、あるいは国教会では管理できないくらいに貨幣経済が発達した。したがって、遼＝契丹は耶律阿保機が907年に建国した当初から国教会に統治上の役割を期待しなかったと思う。そして国家が金融を支配し、計画経済を推進する(北宋が新法の下で行った改革は、平たく言えば遼＝契丹の模倣である。新法派と対立した旧法派に、遼＝契丹の模倣を嫌う「中華思想」があったのかもしれない)。

遼＝契丹は仏教の教義を「呪文」に一元し、儒教を排除した。だが、シャーマンが呪文を唱えて「帝国」を統治できる時代ではない。仏教を非国教化し、儒教を排除しても版図内を統治する法や制度が存在したはずである。

むろん、共同体の慣習のようなものは存在した。したがって、遼＝契丹は雑多な部族の連合国家であった、と論じる歴史家や社会学者もいる。だが、遼＝契丹は大軍を遠征して版図を拡大している。また、独自の文字＝契丹文字をつくり、さらに道路を整備して駅伝制を設けたりしている。そして植民を行い、西ウイグル王国を模倣して冶金＝製鉄も営んだ。そのような「帝国」が、たんに雑多な部族の連合国家であるはずがない。

遼＝契丹の統治は二面的であった、と言われている。すなわち、版図を大きくいくつか分割し、農耕民が居住する地区＝南面と遊牧民が居住する地区＝北面を異なる法や制度で支配した、と言われている。だが、何がそのような「帝国」を可能にしたのか。筆者には、「身分」がそのような「帝国」を可能にしたとしか言いようがない。遼＝契丹は、身分の差異で部族の差異を解消した(ちなみに、北魏や唐の統治も二面的であるが、官位の差異で部族の差異を解消している。身分の定義にもよるが、筆者には北魏や唐の統治が身分制に依拠していたとは思えない)。

魏普南北朝時代に、前秦の皇帝苻堅(在位357～385年)が官位差をテコにして部族差を解消する政策を実施した。同時代の東西ローマ帝国やサーサン朝ペルシャも同様である。中世帝国は、官位差で部族差を解消する「帝国」であったと言える。そして、国教と国教会が「帝国」を支えた。

だが、「広義の中世」の突破期になって、中世帝国は分割統治に移行する。ビザンツ帝国はテマ制を導入し、唐は藩鎮制を導入する。テマ制や藩鎮制は分割統治を可能にするが、官位は残る。しかし官位は身分ではない。身分は職業であり、身分制が職業を家業化する。おそらく、遼＝契丹は史上初の「封建帝国」である(コラム33)。

コラム32: 中世奴隷制の終焉

前章で述べたように、10世紀後半あるいは11世紀初頭、ユーラシア大陸西部の「奴隷にするか奴隷にされるか」の時代が終わる。同時代のユーラシア大陸東部、すなわち中国でも奴隷制の時代が終わる。ただし、ユーラシア大陸西部の場合、イスラーム帝国が大規模な土木工事を止めたことに起因するが、ユーラシア大陸東部＝中国の場合、北宋が大規模な土木工事をはじめたことに起因する。

北宋期の中国で、賤民と呼ばれていた人々(律令制下の唐では奴婢と呼んでいた)が新田に移り、自作農になる。しかし荘園で小作も続ける場合が多かったようである。北宋期の中国では、農民の約8割が自作農であり、小作農であった。

ところで、筆者が知る限り、現代世界で農民が自作と小作を「兼作」している国家がふたつある。ロシアと日本である。ミハイル・ゴルバチョフが行ったペレストロイカの下で、ロシアの農民がコルホーズで小作に従事しながら居留地で自作もはじめた。「兼作」の下で、ロシアの穀物生産量が増大し、農産物の品種も豊富になる(この一点だけを見れば、ゴルバチョフは有能な政治家であった、と言える)。

東西冷戦期のロシアは、世界最大の穀物輸入国であった。ロシアの穀物ターミナル＝穀物庫の大半が今も黒海沿岸にあるのはそのためであるが、現在のロシアは穀物を輸出している。現在のロシアにとって、クリミア半島は穀物輸出の安全を確保する要所である。

現在の日本でも、農民が自作と小作を「兼作」しはじめている。ただし、ロシアとちがいで、減反政策が行き詰まり、農地の荒地化を阻止するためにそうなった、と言うしかない。自作と小作の「兼作」は民主党政権(鳩山由紀夫内閣)下ではじまったが、政権が自民党に移っても続いている。むしろ自民党政権のほうが積極的で、安倍内閣は減反政策を廃止して「農地バンク」を設立した。

筆者は、農民が自作と小作を「兼作」する農業のあり方を賞賛したい。米や小麦のような主要作物は小作をしながら協同生産し、野菜や果実のような商品作物は自作をしながら自由に生産するほうがよい。それが、農民に最低限の所得を保証し、同時に農民の所得増を可能にする(日本の場合、農民は共有地より私有地で小作を行う場面が多いので、あまり賞賛できない。しかも最近の日本政府は、現代版荘園＝農業法人の設立を推進している)。

だが、現在のアメリカや中国の農業は、ロシアや日本の農業と形態がまるで異なる。アメリカの農業は自作中心である。所得が不安定なため、アメリカで離農が加速している。東西冷戦期に150%以上あったアメリカの食料自給率は、現在110～120%程度である。アメリカの市場原理主義者たちは、農産物の輸出入自由化が、アメリカが「農業大国」に復帰すると道である、と思っているかもしれない。しかし放置した農地は数年で荒地になる。離農した農民が荒地化した農地を再生するのは容易でない。市場原理主義者たちが思うほど、農業は甘くないのである。

他方、中国の農業は、小作中心である。所得が低いため、中国でも離農が加速している。現在の中国の食料自給率は100%弱であると言われているが、なぜか中国は世界最大の穀物輸入国である。今後、中国の食料自給率は大幅に低下するかもしれない。

余談であるが、日本の農家一戸あたりの耕地面積は約1.5ヘクタールで、中国の農家一戸あたりの耕地面積は約0.5ヘクタールである。したがって、中国の農家は貧しく、自営が成り立たない、といったことを言う経済学者やエコノミスト、農政学者等がいる。しかし、彼らの言説は認識が不足しているように思う。

中国では、農家は穀物をあまりつくらない。農家はもっぱら野菜を栽培している。農業経験のある読者は容易に理解できると思うが、一戸の農家が営める野菜畑は0.5ヘクタールが限度である。とてもではないが、一戸の農家に1.5ヘクタールの野菜畑は営めない。

中国でコメや小麦を生産しているのは、たいがい農業法人である。しかし農業法人に勤務しながら自前の野菜畑を営むのは容易でない。筆者は、「兼作」は、共有地を活用する協同組合方式でなければ容易にやれない、と考える。

コラム33: 遼と契丹のちがひ

古くから、大興安嶺山脈以東(概ね遼河上流域)で契丹や室韋、奚といった部族が遊牧を営んでいた。しかし突厥やウイグル、高句麗のように目立つ存在ではなかった。唐は高宗の代に高句麗を滅ぼし、遼河流域を支配するが、目的は銅や銅山の確保だけであったように思う。

現実に、唐と遼河流域の東方(現在のロシア沿海州やアムール州、ハバロフスク地区)を支配していた渤海との関係は良好であった。また、唐は新羅と和睦した。そして突厥やウイグルの支配を嫌う契丹や室韋、奚は唐の遼河流域支配を望んでいた(杉山正明氏の著書「疾駆する草原の征服者(講談社)」によれば、郭子儀の部下であった李光弼は契丹の族長の長男である。郭子儀も李光弼も安史の乱を鎮圧した名将として名を残す)。

だが、五代十国時代が遼=契丹の建国を促す。907年(あるいは916年)に即位した耶律阿保機が各部族を束ね、華北とモンゴル高原に侵攻し、その後東方に侵攻して渤海を滅ぼす。

耶律阿保機の死後、彼の次男耶律徳光が燕雲十六州を獲得し、開封を一時占領する。そして国号を定め、「遼」を号した。その後第5代皇帝に即位した聖宗(在位982~1031年)が国号を「契丹」に改めた。しかし第8代皇帝に即位した道宗(在位1055~1101年)が「遼」に戻す。

歴史家たちは、国号の変更は恣意的なものであったと認識している。だが、遼=契丹が史上初の封建帝国であるとすれば、国号の変更は「中身」が伴っている。

耶律阿保機や耶律徳光は、隋唐のような帝国の建設を目指していたかもしれない。すなわち、官位差で部族差を解消する帝国である。したがって、契丹だけでなく室韋や奚といった部族も遼軍の一翼を担った。しかし聖宗=耶律文殊奴は、身分差=職業差で部族差を解消する帝国を目指したように思う。おそらくそれが、多数の漢人が住居する燕雲十六州を平和的に支配する方法であった(同様に、当時のモンゴル高原や沿海州等を平和的に支配する方法でもあった)。

とはいえ、聖宗は平和主義者ではない。聖宗は高麗と戦火を五度交えている。渤海の残存勢力が鴨緑江流域に定安国=後渤海を建国したため、最初の戦火が勃発した。その後遼=契丹と高麗の関係は修復するが、高麗で政変が勃発し、新王朝が北宋に朝貢した。そのため二度目以降の戦火が勃発する。五度目の戦火で遼=契丹軍が惨敗し、激怒した聖宗が大軍を編成して高麗遠征を準備する。

だが、高麗が遼=契丹に朝貢したため、講和が成立した。その後鴨緑江が国境になり、遼=契丹と高麗の関係が修復する。聖宗は平和主義者ではなかったが、好戦的な人物でもなかった。高麗との戦争は皇帝の責務であったように思う。

(五代十国時代の影響があったか否かは不明であるが、韓半島は892年から新羅と後百済、後高句麗が鼎立する後三国時代に突入する。しかし918年、王建が後高句麗王を追放して高麗を開国した。そして935年に新羅を併合し、936年に後百済を滅ぼして韓半島を統一する。926年、遼=契丹が渤海を滅ぼしたが、同年、耶律阿保機が死去して耶律徳光が後を継ぐ。耶律徳光は燕雲十六州の獲得を優先し、韓半島に関心を示さなかった。王建は河北の干渉と内戦の激化を避けながら韓半島を統一する。遼=契丹と高麗の関係が悪化するのには北宋二代皇帝太宗(在位976~997年)が即位してからである)

ところで、聖宗が即位したのは12歳で、国号を「遼」から「契丹」に変更したのは即位した翌年である。したがって、封建帝国を「発明」したのは垂簾聴政を行っていた承天皇太后である。明代に書かれた「楊家将演義」では、承天皇太后は北宋最大の敵=悪役として登場する。しかし彼女は北魏の馮太后に匹敵する賢明な女傑であった(北魏は、孝文帝の代に均田制や三長制を実施するが、孝文帝が即位したのは4歳である。したがって均田制や三長制を実施したのは垂簾聴政を行っていた馮太后である)。

北方謙三氏の著作「楊家将(PHP文庫)」で、承天皇太后は「蕭太后」の名で登場する。北方氏は大英帝国の女王のようなイメージで「蕭太后」を表現しているが、現実にそうであったと思う。遼=契丹の兵たちは、承天皇太后に忠誠を誓い、彼女が遼軍を指揮した。

むしろ彼女の偉大さは封建帝国を発明したことにある。身分は階級ではない。職業である。すなわち、身分制は職業を家業化して固定する制度=掟である。したがって、軍人の家系に生まれなければ、軍人になれない。かなり窮屈な社会であるが、それが軍の巨大化を抑止して平和に寄与した。

承天皇太后=蕭太后が封建帝国を「発明」し、聖宗が具現しなければ、澶淵の盟を結んだ後の遼=契丹が北宋に再度侵攻する場面があったかもしれない。聖宗の死後、道宗が国号を「遼」に戻したのは1066年である。おそらく、道宗は窮屈な封建帝国皇帝から華麗な中華帝国皇帝に変身しようとした。道宗は異常なまでに仏教を好み、寺院を優遇したようである。それが、遼=契丹の滅亡につながる。

(本文で少し捕捉したが、陀羅尼信仰の下で、「読経」が「歌唱」化していた可能性がある。筆者の憶測であるが、遼=契丹では、美声の持ち主でなければ僧侶や尼僧になれなかった。今の日本にも読経を歌唱する僧侶や尼僧がいるが、道宗は「オペラ」の好きな皇帝だったのかもしれない)

5.7 南宋と金の興亡

北宋で新法派と旧法派の対立が生じたように、遼＝契丹で南面派と北面派の対立が生じた。南面派は官僚機構と統治機構の刷新、および律令体制の構築を目指し、北面派は身分制の維持を目指す。サーサーン朝ペルシャにとって、古代アケメネス朝ペルシャが理想の帝国であったように、道宗の代の遼＝契丹にとって、隋唐が理想の帝国であったのかもしれない。1066年、道宗が国号を「契丹」から「遼」に戻したが、この国号変更は南面派の勝利を意味する。

道宗は1101年まで在位し、その間、遼の統治機構が寺院になり、寺院が権益集団化する。他方、身分制が崩壊し、律令制下で土地の兼併が進展する。道宗の死後、天祚帝が即位したが、彼に寺院を排除して国法を制定し、身分制を再構築する意志も能力もなかった。

1114年、女真族の阿骨打(アクダ)が挙兵して反乱を起こし、1115年に現在の黒竜江省ハルビン市付近で金の開国を宣言する。天祚帝は大軍を率いて阿骨打を攻めたが、敗北する。天祚帝の敗北を知った北宋は金と同盟して遼を挟撃し、燕雲十六州を奪還しようとする。1120年、北宋は金と海上の盟を結び、遼を挟撃する準備を整えた。

だが同年、江南の地で方臘の乱が勃発する。北宋は方臘の乱の鎮圧に軍＝禁軍を投じ、金との挟撃作戦に出遅れる。結局、金軍が単独で燕雲十六州を奪取する。1122年、遼軍は入来山で金軍に再度敗北し、天祚帝は現在の吉林省長春市付近に逃れ、その後西夏に亡命する。阿骨打は1123年に病死するが、1125年に金軍が天祚帝を捕縛し、遼が滅ぶ。

阿骨打は海上の盟を尊重し、奪取した燕雲十六州のうち6州を北宋に割譲した。だが、北宋の徽宗が遼の残存勢力と結託し、燕雲十六州の残り10州を奪取しようとする。阿骨打の死後、金の皇帝に即位した太宗＝呉乞買(ウキマイ)が激怒し、北宋に侵攻する。1126年、金軍は開封を陥落する。そして徽宗と彼の長男欽宗を捕縛し、現在の黒竜江省ハルビン市付近に幽閉する(これが、前節で述べた「靖康の変」である)。

他方、華北への侵攻が金の西方支配を鈍らせた。金の西方支配は西夏と接するオルドス地方で止まる。金は北宋領の一部(現在の甘粛省等)を割譲して西夏を服属したが、遼が支配していたモンゴル高原が空白地帯化する。金に敗北した遼の残存勢力がモンゴル高原の同族たちと合流し、イリ川流域に移住した。そして耶律大石が「西遼」を建国する(その後の耶律大石と西遼の動向はすでに述べた)。

金が徽宗と欽宗を捕縛した後、趙構が即位して北宋の再興を目指す(趙構は徽宗の九男である)。主戦派の宗沢が義勇軍を編成し、開封や洛陽、その他華北各地で金軍と戦う。筆者は、岳飛の活躍や秦檜の「悪事」を語るつもりはない。重要なことは、義勇軍が金軍と戦ったおかげで、高宗＝趙構が臨安(現在の杭州市)に逃れ、南宋を開国したことである。さらに義勇軍および南宋軍と金軍の戦いが1141年の紹興の和議まで続いたことである。すなわち、阿骨打が遼に反旗を翻してから30年弱、華北で戦乱が続いた。筆者が重視したいのは、30年弱という戦乱期間である。約30年の戦乱で、綿密な計画経済下にあった華北(とりわけ淮北＝淮河以北)が荒廃し、生産力を喪失する。

1161年、大軍を率いて南下した海陵王が陣中で死去し、世宗が金の皇帝に即位した。世宗は名君であったと言われていたが、在位中(1161～1189年)に反乱が多発している。また、世宗は北宋の計画経済を継承していないし、新たな計画経済を実施してもいない。金朝期の淮北で多くの農民が流民化した。南宋に逃れた農民も多数いた。テムジン＝チンギス・カン率いるモンゴル軍が金に侵攻した頃の淮北(中原の地)は荒廃していた。

(金史では、海陵王は中華思想に染まった暗君とされている。だが、彼は淮北の再生を真面目に考えていたように思う。海陵王は、尚書省を皇帝直屬下に置き、交子に類する「紙幣」を発行して計画経済を実施した。また、燕京に遷都し、さらに開封に遷都する。海陵王は、南宋に侵攻したが、淮北での屯田も目的のひとつであったように思う。海陵王が陣中で殺害されたのは、おそらく兵たちが屯田を嫌ったためである。女真族至上主義者の世宗が、海陵王を暗君に仕立てた。世宗は儉約を重視して和平を推進し、約28年在位したが、淮北の再生に取り組む場面はなかった)

遼＝契丹と金はまるでちがう。遼＝契丹にとって、モンゴル高原の支配は必須であった。燕雲十六州を獲得したため、「封建帝国」を発明しなけりなかつたが、遼＝契丹の本質は匈奴や柔然、突厥やウイグルと同様な遊牧民国家である。しかし、金は華北で軍を全面展開したため、モンゴル高原を支配できなかった。したがって遊牧民国家にもなり得ない。

作家の故陳舜臣氏は、著書「中国の歴史(講談社文庫)」で、遼＝契丹と金のちがいは、「草原の民」と「森の民」のちがいである、と論じている。他の作家や歴史家たちも同様に論じている。彼らは、契丹人の生誕地が遼河流域で、女真族の生誕地がアムール川流域であることを重視する。だが、遼河下流とアムール川下流は遠く離れているが、上流域は地理的に近い。遼＝契丹と金のちがいを民族差や地域差に置き換えられないほうがよい。遼＝契丹も華北で軍を全面展開すれば、金と同様になっていたかもしれない。

ところで、北宋は1117年に大理国を冊封体制下に置いた。すなわち、大理国を属国化した。そして1120年、方臘の乱が勃発する。方臘の乱の鎮圧に禁軍を投じた北宋は、金との挟撃作戦に出遅れるが、筆者が重視したいのは、大理国の属国化と方臘の乱のつながりである。大理国の属国化は北宋の負担を一時大きくする。しかし北宋は金と同盟を結び、遼を挟撃する戦略を立てながら、そのような重大時期に負担を一時大きくしている。

考えられる理由がひとつある。財政難である。北宋は王安石が首席宰相に就任した神宗の代に「交子」の発行額を倍増した。元来、交子は商人が発行する約束手形であったが、新法派が支配する北宋期に政府手形になる。交子＝政府手形の発行増は新法派が提唱する「理財」政策であった。神宗没後に即位した哲宗も徽宗も新法派を擁護したため、交子の発行額がますます増大する。徽宗の代の交子発行額は、神宗の代の約20倍に増大していた。そして交子の価値と信用が暴落する。

手形は、償還期限が来れば現金化できるメタ貨幣である。手形に金利は生じないが、デフレ下では、蓄財手段としても有効である。北宋の朝廷が発行する交子＝政府手形の償還期限は概ね3年であったようだが、償還できない場合、新たな交子を発行してつなぐしかない。だが、「発行の連鎖」は永遠に続かない。徽宗は値引き＝銭引きして交子を償還した。当然、交子の価値と信用が暴落する（歴史家や経済学者の一部が、交子を「紙幣」などと論じているが、間違っている。交子は「手形」である。手形はメタ貨幣であって、貨幣ではない）。

大理国（概ね現在の雲南省）は銀の産地である。したがって、北宋が大理国を属国化した目的は銀を獲得して交子＝政府手形の信用を回復し、遼を挾撃する戦費を捻出するためであったと思う。だが、大理国を属国化しても、ただちに多量の銀を入手できるわけではない。歴史家たちは、疑問を感じつつも、方臘の乱の原因は江南で産出する花石綱（珍花・名木・奇石等）の蒐集であったと論じている。中国の史書にそのような記述が多いのかもしれないが、風流天子徽宗の蒐集が大反乱の原因になったとは考えにくい。筆者は、方臘の乱の原因は交子の暴落であったと考える。ちなみに、方臘は漆園の経営者であった（陶工であったとの説もある）。

むしろ銀が世界通貨になっていたことが大きい。交子＝政府手形の発行から察するに、北宋もユーラシア大陸西部と同様に、あるいは遼＝契丹と同様に国教会を必要としなくなっていた。北宋期に、中国仏教の主要宗派が天台宗から禅宗と浄土信仰に移行する。官僚が禅宗と儒教を好み、民衆が浄土信仰に帰依した。

筆者は、信仰に疎いが、浄土信仰は死者を火葬する信仰である、という程度のことは知っている。しかし儒教は「孝」を説いている。親の死体の焼却は「孝」に反する。とはいえ朝廷の官僚＝儒教徒が新法派と旧法派に分裂して対立している状況下では、廃仏などできない。

結局、北宋朝廷は民衆に「礼」を語りながら浄土信仰を抑止する。それが、南宋期の儒・道・仏の三教融合と道学あるいは宋学の誕生につながるが、遼＝契丹とは異なるプロセスで北宋も封建帝国化したと見られることもできる。

ところで、岳飛を処刑した秦檜は新法派であった。高宗の代の南宋は宰相に就任した秦檜が実権を握り、華中と華南で「改革」を推進する。秦檜の死後、海陵王の南下が頓挫して金の脅威がなくなり、新法批判がはじまる。「北宋が滅亡した原因は新法である」、というわけである。

とはいえ、北宋期の旧法派がひとつの理念の下で団結していたわけではない。旧法派とは、たんに新法に反対する人々の総称にすぎない。しかし南宋での新法批判は、新たな統治制度のはじまりになる。すなわち、封建制が統治制度になる。

（北宋とマケドニア朝ビザンツ帝国に同時代性がある。ビザンツ史の専門家は、北宋の新法派と旧法派の対立を、国法派と慣習法の対立に置き換え論じるかもしれない）

南宋で士大夫層が誕生し、識字率が高まった。そして朱熹（1130～1200年）が道学＝宋学を集大成し、朱子学を「発明」する。しかし朱子学の不思議＝三教融合より、封建制下で農業が発達したことに着目したい。華北から逃れてきた農民も多数いたため、南宋の人口約6000万のうち5000万以上が農民人口である。そして、南宋でも農民の大多数が自作と小作を「兼作」する。北宋の場合、農民は荘園で小作をしたが、南宋の場合、農民は概ね共有地で小作をした。すなわち、南宋期の中国でも荘園が消滅し、村落共同体すなわち農村が誕生する。村落共同体＝農村が封建制を可能にした。

農業の技術革新も進展した。鉄製農具が普及し、肥料の使用もはじまる。農産物の生産量が増大し、農産物が商品化した。また、絹や陶磁器も量産され、商品化した（隋唐時代にあった絵柄や模様がなくなり、陶磁器は造形美を追求したシンプルなものになる。現代も同様であるが、装飾のないシンプルなお品ほど万人受けする。ちなみに、高麗は造形美に装飾を融合した高度な陶磁器を「発明」している）。そして海運が盛んになる。すなわち、南宋期の中国で商品経済が誕生した。南宋期の中国は「東洋のルネサンス」期であったと言える（同時代のコムネノス朝ビザンツ帝国が南宋とよく似ている。ユーラシア大陸東西で封建制と商品経済がほぼ同時に誕生し、「広義の近代」の出現期がはじまる）。

南宋は「会子」を発行した。北宋が発行した交子を「紙幣」と論じる歴史家たちは、南宋が発行した会子も交子と同様であったと論じている。だが、交子は政府手形で、会子は政府手形というより政府債券に近い。すなわち、南宋は政府資産を担保にして会子を発行した。したがって当初、南宋は会子の発行限度額を1000万貫（1貫は銅貨1000枚である）と定めていた。

会子もメタ貨幣であるが、交子と異なり、信用度が高い。しかも南宋は会子と塩や茶のような専売品の交換を認めた。したがって、交子は発行額が約20倍になった場面で暴落したが、専売品＝実物商品の裏付けを得た会子はその程度の発行額では暴落しない。南宋は会子の発行限度額を1000万貫から逐次増大し、末期の発行限度額が6億5000万貫になる。すなわち、発行限度額が国民ひとりあたり1貫以上になる。それでも会子が暴落する場面はなかった（商品経済の下で、会子が金融商品化したとも言える。あるいは、物品貨幣が消滅し、会子が事実上の紙幣として機能した）。

1273年、モンゴル軍が南宋防衛の要であった襄陽を陥落する。そして1276年、モンゴル軍は南宋の

首都臨安を陥落する。1279年、最後の皇帝祥興帝が崖山の戦いで入水し、高度な中世文明を築いた南宋が滅ぶ。臨安の陥落は1204年のコンスタンティノープル陥落に似ているが、しかし十字軍とちがいで、モンゴル軍は略奪を行っていない(コラム34)。

コラム34: 「正気の歌」

南宋の「歴史物語」は、岳飛ではじまり文天祥で終わる。そして、岳飛が国民的英雄になり、文天祥が忠臣義士の鏡になる。ただし、文天祥が忠臣義士の鏡になった国は日本である。古来、多くの日本人が文天祥を敬愛し、彼が獄中で書いた「正気の歌」を愛読した(作家の故陳舜臣氏が著書「中国の歴史(講談社文庫)」で「正気の歌」を詳しく解説しておられる)。

「正気の歌」の中で、文天祥は宇宙が「気」で満ちていると語る。「気」には種類があり、最上の「気」が「正気」である。人間も他の生物も物質も、「気」が具現した存在である。過去に、「正気」が具現した人間存在が多数いた。文天祥は、彼らの名を上げ、自身も「正気」が具現した人間存在である、と語る。

文天祥が、「正気の歌」で南宋を賛美する場面はない。元朝を卑下する場面もない。忠臣義士のあるべき姿を語る場面もない。文天祥は、たんに自分を語る。そして自分に正直に生きるという。すなわち、「正気」が具現した人間存在であるが故に、元朝の家臣になれない、と語る。

筆者には、文天祥は実存主義者であったとしか言いようがないが、歴史家や作家たちは、文天祥を認識する前に文天祥を解釈しようとする。そのため、つまらない解釈が多い。歴史家や作家たちは、クビライが文天祥を長く獄中に留め帰順を迫ったのは、中華思想に染まった皇太子のチンキムが彼の才能を惜しんだためである、と論じる。あるいは、南宋残存勢力の反乱を防ぐためであったと論じる。だが、筆者には、クビライもチンキムも文天祥の思想を必要としていたように思える。

むしろ筆者は朱子学や道学に疎い。だが、文天祥を除けば、朱子学や道学の学徒で「気」に種類があると語った人物はおそらくいない。クビライとチンキムは、モンゴル帝国＝世界帝国に南宋一の秀才文天祥の思想が必要であると判断したように思う。

多くの日本人が、「正気の歌」を愛読したのは、そこに朱子学や道学の真髄を見たからである。日本はアニミズムの国である。日本では、様々な生物や物質に精霊が宿る。男女が性交しても、母体に精霊が宿らなければ子供は生まれぬ。しかし、「気」が人間や他の生物、物質をつくるのであれば、精霊は不要である。過去の日本人にとって、「気」が具現したものが人間や他の生物、物質であるといった考えは、驚くべき異国の「先進思想」であった。

シャーマニズムを信仰していたモンゴル人にとっても同様であったように思う。とはいえ、その「気」に種類があるとすれば、朱子学や道学とシャーマニズムやアニミズムの調和が可能になるかもしれない。あるいは、キリスト教やイスラーム教、マニ教等との調和も可能になるかもしれない。クビライとチンキムは、そのような「超中華思想」を必要としていたように思う。ちなみに、当時のジョチ・ウルス＝キプチャク・ハン国はイスラーム教国で、フレグ・ウルス＝イル・ハン国はキリスト教国である。

ところで、幕末維新の志士にとって、「正気の歌」は座右の書であったが、幕末維新を題材にして作品を書く現代の作家たちが、「正気の歌」を読んでいるとはとても思えない。もしも幕末維新の志士の多くが、自身を「正気」が具現した人間存在であると信じて行動していたとすれば、そして現代の作家たちがそれを認識しているとすれば、彼らが描く幕末維新の人物像は今とはちがうものになると思う。

(幕末維新の志士たちは、倒幕どころか世界帝国の建設を目指していたかもしれないのである。日本史の専門家たちは、山縣有朋が推進した日韓併合を対ロシア政策であったと論じ、とりわけ加藤陽子氏は、山縣有朋が地政学を信奉していたと論じている。だが、幕末維新の志士たちが、世界帝国の建設を目指していたとすれば、山縣有朋もそのひとりである)

「正気の歌」は忠臣義士の歌ではない。「正気」の考えの下で意外な行動や組み合わせが生じる場合がある。また、「正気」の考えが差別を助長する場面もある。筆者は、「正気」の考えが素晴らしい考えであるとは思わないが、しかし「正気の歌」は既存の朱子学や道学を覆す思想を含んでいる。文天祥はそれを後世に伝えた。文天祥は、有能な文官であり武官であり、南宋の英雄であり偉大な思想家であった。